●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告

北京市・甘粛省蘭州市

2013 年 6 月 23 日(日) ― 6 月 29 日(土)

はじめに…… 2

1. 実施概要…… 4

2. 表敬訪問…… 8

3. 学校訪問…… 16

4. 成果と今後への活用…… 30

資料…… 43

国際連合大学 [UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

はじめに

国際連合大学(UNU:United Nations University)は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)へ委託し、広く展開しています。

2002 年からはじまった「国際教育交流事業」では、2013 年 5 月までに 10 回にわたって中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに述べ 1,200 名を超える中国の教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国の教育部による招へいプログラムとして、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたび 2013 年 6 月 23 日から 6 月 29 日に実施された「中国政府日本教職員招へいプログラム」では、2012 年

10 月に中国教職員の受け入れにご協力いただく予定だった自治体や学校の教職員、2013 年 10 月に受け入れていただく自治体や学校の教職員と、公募で選ばれた教職員が参加しました。中国教育部で中国の教育事情や制度について説明を受けたのち、北京市と、甘粛省蘭州市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、文部科学省、外務省、及び、甘粛省教育庁、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2014 年 3 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1. 実施概要

今回の国際教育交流事業中国政府日本教職員招へいプログラムは、2013 年 6 月 22 日に事前オリエンテーションを行い、6 月 23 日から 6 月 29 日の 7 日間に渡って実施された。中国への出発前夜、中華人民共和国駐日本国大使館で、日中相互の教育の文化交流を目的として日本教職員訪問団の訪中に向けて、壮行夕食会が催された。翌日 6 月 22 日の早朝、訪問団は空路で羽田空港から北京首都国際空港へ向かった。

今回の訪中では、中国教育部と甘粛省教育庁の協力を得て、北京市内で1校、甘粛省蘭州市で 6 校の学校訪問をした。各訪問地では、中国教育部表敬訪問、甘粛省教育庁表敬訪問、学校訪問に加え、学校関係者との意見交換や文化施設の見学を通じて交流し、そこから多くを学んで帰国した。

今回の訪問団の参加者の構成は、以下のとおりである。2012 年 10 月に訪問を予定していた自治体と学校として、熊本県荒尾市教育委員会、東京都多摩市教育委員会、長崎県長崎市教育委員会、江東区立八名川小学校、東京都稲城第二小学校、市川学園市川中学・高等学校、公文国際学園から選出された教職員、そして、2013 年 10 月に中国教職員招へいプログラムで受入れ予定の自治体の教職員も、交流の基盤づくりのため参加した。2013 年 10 月に訪問予定の自治体は、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、岡山県総社市、和歌山県である。またこのほか、一般公募から選出された 3 人が加わり、合計 21 名が参加者として中国に向かった。このほか、国際連合大学、文部科学省およびユネスコ・アジア文化センターから計 4 名が同行した。

日本教職員訪問団の団長は、長崎県長崎市立大浦小学校校長の於保孝一氏、副団長は神奈川県横浜市立永田台小学校の校長住田昌治氏と、荒尾市荒尾第一小学校の校長の橋本直氏の 2 名である。

出発前日の 6 月 22 日、羽田空港近くのホテルで事前オリエンテーションが実施された。オリエンテーションでは、国際連合大学大学院事務局長秋葉正嗣氏、ユネスコ・アジア文化センター事務局長島津正數、文部科学省初等中等教育局教職員課課長補佐の平井敏彦氏からあいさつがあった。続いて、文部科学省生涯学習政策局調査企画課専門職の新井聡氏より、中国の教育概要、初等中等教育概要、多様性から見る中国の教育についての講義があった。参加者がそこで得た知識は、中国訪問中の教育現場の生の情報を見聞きする際、中国の現状を知る際の基礎知識として大いに役立つものとなった。

その後、訪問団は、前年度プログラム参加者を代表して聖徳学園中学・高等学校主任教諭の佐藤尚美氏と慶應義塾幼稚舎教諭の井川裕之氏から前年度の経験に基づいた見所や諸注意等が、今回の参加者に向けてアドバイスされた。パワーポイントと写真を交えた説明として意見交換の時間は参加者にとって、今回の訪問目的の意識を高める有益なものであった。

オリエンテーション終了後に招かれた中華人民共和国駐日本国大使館主催の夕食会では、公使参事官の白剛（BAI Gang）氏をはじめとする大使館関係者らの話や温かい対応で、それまで緊張していた団員たちも、中国に対する親近感を更に深めてプログラムに参加することができた。

プログラム第 1 日目の 6 月 23 日の早朝、訪問団 25 名は羽田空港から北京首都国際空港にむけて出発した。空港では、主催側の担当の中国教育部国際協力交流司アジア・アフリカ課の馬力（MA Li）氏の出迎えを受けた。この後、馬力氏は全行程同行してくれた。訪問団一行は、専用バスで、北京オリンピックのメイン会場となった鳥の巣（正式名称：北京国家体育場）の外観を見学した後、国家博物館の特別展示室と天安門広場を見学し、教育部近くのホテルに向かった。

第 2 日目の 24 日午前に、中国教育部への表敬訪問を行った。中国教育部では、今回は国際協交流司の司長の劉宝利氏に代わり、初等中等教育二司副司長の申継亮（SHEN Jiliang）氏が、中国の教育事情について、制度と現状を説明した。また、アジア・アフリカ課から馬力氏と、鄭晗（ZHENG Han）氏が通訳として同席した。申継亮氏より、中国の教育事情が詳しく説明され、その

後、訪問団からは活発な質問が出された。中国教育部から、当初の予定の時間を大幅に超え、約2時間に渡って、詳しく具体的な回答があった。訪問団は中国の学校訪問をする前に、中国の教育事情の理解を深めることができたため、その後に訪問した各学校で、中国における教育事情や方針について正確な詳細情報と知識を得ることができた。この日、行われた教育部主催の昼食会では、表敬訪問で対応いただいた申継亮氏、馬力氏、郯晗氏に、前年度本プログラムに同行した王鉄輝氏が加わった4人が主催側ホストとして出席し、訪問団と歓談し交流した。

午後、訪問団一行は北京市内にある北京市第十五中学を訪問した。同校では副校長から教育内容についての説明を受け、その後、教室の一部を見学し、校舎の屋上から学校全体を視察した。続いて校内にある博物館を見学した。博物館では、生徒が所蔵作品について、訪問団に説明を行った。北京市第十五中学では、在中国日本国大使館広報センターから、公使参事官の臼井将人氏と一等書記官の名子学氏が同行した。

第3日目の25日から第6日目の28日の期間、訪問団は甘粛省蘭州市で特別支援学校を含む 6 校の初等

《中国の教育に関する基礎データ》

◆中国の総人口 133,972 万人

	学校数	生徒数	教員数
小学(小学校)	257,400	99,407,000	5,617,000
初中(中学校)	54,900	52,793,000	3,525,000
高中(普通高等学校)	14,058	24,273,000	1,518,000
特別支援学校	1,706	426,000	39,700

＊2011 年度データ。
出典:文部科学省「諸外国の教育動向 2011 年度版」
(小学校、中学校、普通高等学校の学校数、生徒数は国公立と私立の合計とした。)

◆訪問都市の人口と面積

北京市(2011 年統計)

面積	16,410.54 ㎢
人口	2018 万人

甘粛省蘭州市(2009 年統計)

面積	約 13,100 ㎢
人口	332.18 万人

出典:JETRO 中国エリア別情報

中等教育の各学校を中心に中国の地方教育を訪問した。

甘粛省は中国内陸部、黄河の上流に位置し、蘭州市はこの省都である。訪問団一行は北京首都国際空港から空路で甘粛省の蘭州中山空港へ向かった。空港では、日本教職員訪問団員らは甘粛省教育庁のスタッフと甘粛省教育庁が手配した通訳の出迎えを受けた。訪問団一行はそこから約 70kmに位置する省都の蘭州市にバスで移動した。蘭州市は黄河の上流、海抜1,510mの河畔に開けた都市であり、甘粛省の省都として甘粛省の政治・経済・文化・交通の中心地となっており、教育の水準は高い。

期間中の訪問団の滞在場所となる蘭州西湖銀峰ホテルの会議室では、甘粛省教育庁から副庁長の王萍（WANG Ping）氏と同教育庁から来席し、甘粛省教育庁の表敬訪問が行われた。まず、王萍氏から訪問団へ歓迎のあいさつが述べられ、続いて甘粛省の人口、地理、歴史、風土、文化、特産等の基本情報の説明があった。その後、それらを背景とした甘粛省の初等中等教育の教育事情について説明があり、訪問団は甘粛省の教育について詳しく知ることができた。

第4目の26日の朝、訪問団一行は、バスで甘粛省蘭州実験小学（優良小学校）を訪問した。学校では由邱（YOU　Qiu）校長の出迎えで、一行は蘭州実験小学校に招き入れられた。校庭には、生徒の絵画や書道の作品が飾られており、中でも100mを超す書道の作品にはその迫力とレベルの高さに驚かされた。その後、一行は校史展室や、各教室での授業の様子、体育館等を見学した。全校生徒による一斉運動（日本のラジオ体操のようなもの）を見学した後、団員らは校庭で遊ぶ子どもたちと一緒に縄跳びをしたり、手品を紹介したりして日本の文化を紹介して交流した。

蘭州実験小学を後にした一行は、名物の蘭州ラーメンの昼食をとった後、蘭州市第三十五中学（優良中学校）を訪問した。学校はビル街の真ん中にあり、校門には「日本教職員歓迎」の電光掲示板が掲げられていた。中央にある校庭では校長の彭偉（PEN　Wei）氏が、授業中の体育の授業の紹介を行い、続いて校内で行われている各教室の通常の授業を案内してくれた。団員らは、PC の授業や国語の授業を見学し、授業中の生徒の様子や生徒数、設備等を詳しく見ることができた。同校では、教師は手助けして指導するだけでなく、生徒の自主性と個性を伸ばす総合芸術の授業も行われており、団員らの興味をひいていた。

プログラム第5日目の27日は午前中に西北師範大学附属中学（優良高校）、西北師範大学第二附属中学（優良中学校）を訪問した。両校は離れた場所にあるが、いずれも整った環境の中で生徒たちが学んでいる。西北師範大学附属中学では、在校生一日のスケジュールに併せ、1 年のスケジュールについても詳しく説明された。学校見学では、学校所有の博物館、校史館、体育館や校庭に案内された。体育館では、生徒と団員らがバトミントンで羽を交わして握手をする場面も見られた。

午後に訪れた西北師範大学第二附属中学では、校長の窦継紅（DOU Jihong）氏のあいさつと学校概要の説明の後、校内見学をした。その後行われた教職員同士の意見交換の後、代表生徒との自由な交流の時間が設けられた。団員らは、それぞれに英語を使って話したり、日本語のできる生徒と話しあったり、言葉は使わずに書道で交流の時間を持ったりした。約 1 時間半あった交流の時間だが、団員らにはあっという間の楽しい時間であった。

27 日の夜、団員らは宿泊ホテルの会議室で、これまでの訪問での気づきや帰国後の現場への生かしを共有する情報共有会が行われた。会は、自分たちがそれぞれ特に興味深かった学校に焦点を当てて、個々の意見を出し合う有意義な時間となった。

第 6 日目の 28 日は、特別支援学校の蘭州市城関区輔読学校を訪問した。同校は生徒の送迎がしやすい立地の、街の繁華街の中にある。校長の楊永霞（YANG Yongxia）氏から、「この学校では生きていく力をつけることを学ばせる」との説明があり、団員らは日本の教育との共通性を見出していた。 校内は明るい雰囲気で、教師は生徒一人ひとりに丁寧に接していた。今回の団員の中には特別支援学校からの参加者もおり、強い関心を持ってメモをしたり、質問をしたりしていた。団員らは、通常行われている算数、国語、音楽、体育、洗濯や料理等の授業を見学した。最後に盲目の生徒が作ったという花瓶が記念品として訪問団に手渡され、握手を交わした後、学校を去った。

蘭州市で最後の昼食をとった団員らは、蘭州市の滞在期間、ずっと同行してくれた甘粛省のスタッフらに感謝を述べ、日中の更なる友好を願った。その後、蘭州中

川空港から空路北京へ移動した。

最終日の 6 月 29 日の早朝、ホテルをチェックアウトした一行は北京首都国際空港にて解散し、参加者の居住地にあわせ、羽田空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。

在日本国中国大使館主催の夕食会にて。左が公使参事官の白剛氏。

東京でのオリエンテーション。

蘭州市を横断するように流れる黄河

前年度プログラム参加者から今年度参加者へのアドバイス。

情報共有会では、中国での交流の成果を参加者同士で共有した。

2.表敬訪問

中国教育部［北京市］
甘粛省教育庁［蘭州市］

訪問団は首都の北京市にある中国教育部と、甘粛省の省都・蘭州市では甘粛省教育庁を表敬訪問した。教育部からは中国の教育概要と教育方針、さらに中国の初等中等教育の特色と、最近中国で導入された学校の多面評価システムについての説明があった。

中国教育部

［北京市］　6 月 24 日(月)

中国教育部は 1998 年 3 月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中央政府の組織である。教育全般を総括し、日本の文部科学省にあたる。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

北京到着の翌日の午前、訪問団一行は中国教育部を表敬訪問した。中国教育部で、教育部基礎教育二司副司長の申継亮氏から訪問団に対する歓迎あいさつがあった。その後、日本教職員の訪問団を代表して団長の長崎市立大浦小学校校長の於保孝一氏が今回の歓迎に対する謝辞を述べた後、出身地の長崎市と中国の交流を例に、日中交流の深い歴史を紹介した。

つづいて、申継亮氏から中国の初等中等教育について詳しい説明があった。今回のプログラム全体を通して同行頂いた教育部国際協力交流司アジアアフリカ処の馬力氏が同席し、また同処の鄭晗氏が通訳を行った。

1. 教育部基礎教育二司副司長　申継亮氏からのあいさつと説明
   - 日本と中国には長い交流関係があり、両国は相互協力国である。
   - 日中間の初等中等教育の教職員交流は 2002 年から行われており、日本からは毎年 25 名の先生方を招へいし、中国からも多くの教職員を派遣している。
   - 中国の基礎教育（日本語の「初等中等教育」に相当する）は、幼児教育・義務教育・高等学校教育に分けられる。
   - 中国では、国家、地方、学校の 3 つのカリキュラムがある。 国家カリキュラムは国家が決定し、全体の 80%をしめる。残りの 20%が地方と学校のカリキュラムである。
   - 小学校は 8 つの科目からなる。芸術が美術と音楽に別れることもある。
   - 中学校は 8 プラス 4（歴、地、物理、化学）科目、外国語は（英、露、日）から選択する。
   - 高等学校の教育はより専門的に 8 つの分野があり、分野の下にブロックがある。
   - 高等学校は必修（116）と選択（28）の計 144 単位を取得する。
   - 教材については、国家カリキュラムの教材は要綱にもとづいて作成され、学校が認定する。地方カリキュラムの教材は地方教育庁が認定する。
   - 授業時数は小学校 1、2 年生（26）、小学校 3～6 年生（30）、中学校・高等学校（34）が一週間の時数である。
   - 初等中等教育 9 年間で 9.92 時間になる。高等学校では 10 日間の社会活動も含む。
2. 訪問団団長の於保氏からのあいさつ

   今回の訪問団受入れに対するお礼に続き、日中間の交流は古く、教育についても、不易流行、知育、徳育、体育、ICT について、本質は同じであると述べた。

上段：中国教育部１階ロビーにて集合写真。　後列左から６番目が団長の於保孝一氏。
下段左：訪問団より記念品贈呈。右から２人目が中国教育部基礎教育二司副司長の申継亮氏。
下段右：中国教育部の正面玄関。

---

3. 質疑応答

訪問団からの積極的な質問に対し、中国教育部基礎二司副司長の申継亮氏が回答した。

Q. 中国は小学校から教科担任制か？（住田）

A. 基本的にはそうである。

Q. 小学校からの英語教育の割合を教えて欲しい。（米山）

A. 小 3 から英語の授業、全体の 6～10%の割合で近年特に力を入れている。進学の必須科目であり、留学を目指す学生も多い。

Q. 小学校 3 年生から英語は書くことに力を入れているのか。週何時間か。（宇土）

A. 応用力を重視し、聞くこと話すことに力をいれている。週2時間。

Q. 教員の資質向上についての施策を教えて欲しい。（於保）

A. ・教員の種類、研修（1 年目）→3 級教師（2 年目）→2 級教師→1 級→高級教師、特級教師。

・ 国家研修 7，8 億人民元、5 年ごとに 360 時間の研修→資格の再確認

Q. 日本の高等学校は 2013 年から英語の授業は英語で行うようになった。中国はどうか。（前田）

A. 強制ではないが英語の授業は英語で行う。英語教師の質は高い。

Q. 日本では、生徒のストレス、家庭、地域の教育力の低下の問題等があるが、中国にも同様の問題はあるか。また、学校への期待は。（橋本）

A. 中国でも同じような問題はある。教育レベルは落とさないようにしつつも、受験などによる生徒の負担を軽減する対策をとっている。例えば、生徒の負荷になり過ぎるような量の宿題は出さないなど。学校に行くのは試験のためだけではない。塾の負担を減らすことが課題。学校に対しては、グリーン評価を設け、5 つの方面から学校を多面評価し、公表（20 項目）している（学校での成績、道徳、体の資質、生徒の自発性、生徒の学校での負担）。先行導入した上海では既に成果が出ている。また、高等学校・大学の試験を改革しおり、体育も試験科目に加え、生徒の負担をバランスよ

くしている。

Q. 道徳を評価しているか。(森田)

A. 小・中の道徳の授業と社会体験活動については9ヵ年ポートフォリオを行っている。毎年、優秀な生徒は表彰している。

Q. 特別支援教育の中国の現状について教えて欲しい。(森木)

A. 同じクラスや特別支援クラスで対応(55%)特別支援学校で対応(45%)。人口 30 万人以上の県に対し、特別支援学校設置、47億人民元投入、国家カリキュラムもある。また、中国では、治療と教育の両方を行っている。学校リハビリセンターを作っていく予定である。

Q. 特別支援学級等の加配の状況について教えて欲しい。(福島)

A. 6～14 歳の 40 万人が特別支援教育を受けている(クラスに 1～2 名程度)。
先生の状況→加配は決まっていない。一部の先進校では加配が行われている。

Q. 特別支援教育における義務教育の免除や猶予について教えて欲しい。(池本)

A. 義務教育法:障がい者教育条例で決まっている。学校は、 8 歳から入学しても良いことになっており、義務教育が 10 年になっている生徒もいる。

Q. 小学校を含めた英語教育について教えて欲しい。(久松)

A. 2001 年から英語教育に力を入れた。中1は日本よりレベルが高い。レベルの違いは地域ごとの教材で対応している。

Q. 可能であれば教科書を頂けないか。(久松)

A. 今、用意できる分であれば差し上げます。
(主に小学校の教科書を 20 冊ほど頂戴した)

Q. 教科としての書道について教えて欲しい。(松本)

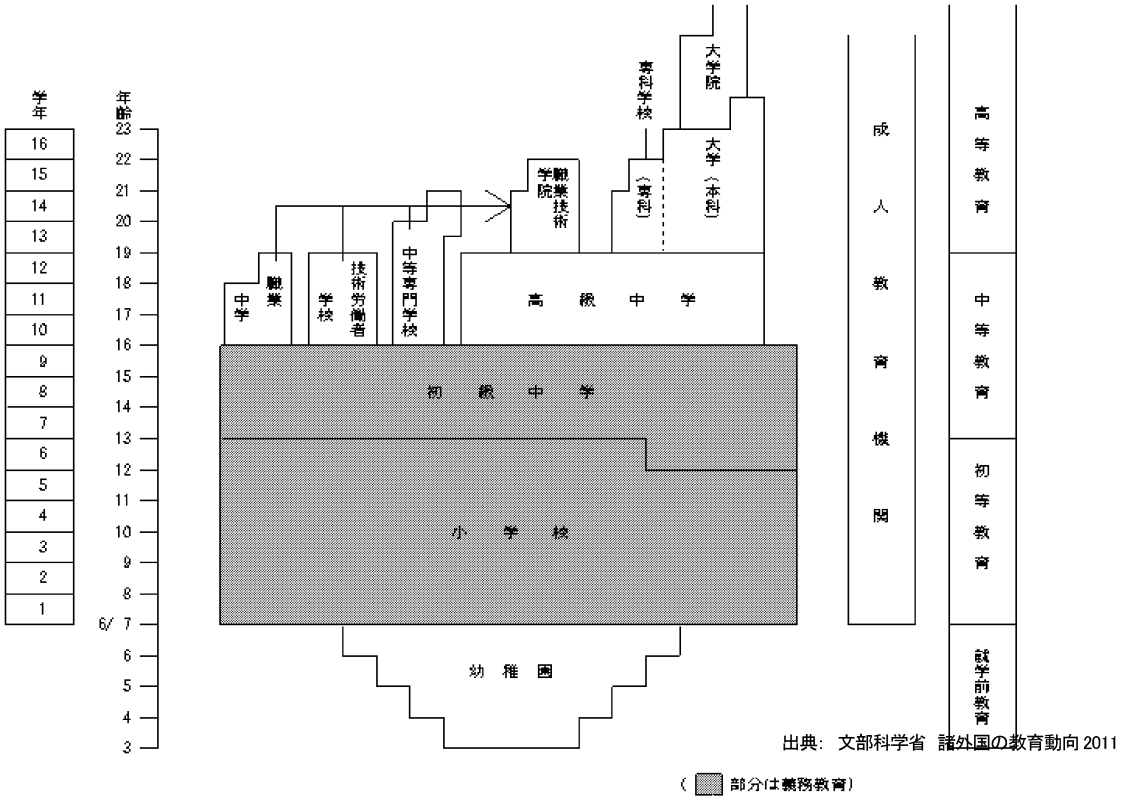
A. 高等学校では書道を必修にしていない。地方カリュキュラムとして実施している。書道の先生が不足しているので書道家協会と協力し、育成している。簡体字は継続。

Q. 中国においての ESD 活動について教えて欲しい。(島津)

A. ESD 専門家委員会と実施委員会を設置している。教育部に指導要綱もある。また、中国には 省エネ教育や ESD に関する月刊誌、パイロット学校もある。

Q. 日本では、現在、学校でのいじめ、不登校、虐待などが大きな問題になっているが、中国にもあるか。(大賀)

◆ 参考 ◆ 中国の教育系統図



A. 中国でも増えているが、日本ほどではない。体の暴力→言葉の暴力。女の子が男の子をいじめるケースが増えている。学校はすぐに対応している。

4. 質疑応答後、団長の於保氏からのお礼のあいさつに対し、申継亮氏から、交流を通して相互に理解し、教育交流が国家間の友好へと繋がってほしいとのあいさつが述べられた。

（一瀬　裕之）

《参加者の感想》

荒岡格生……中国の初等中等教育について説明を聞くことができ、中国の教育制度、教育の方向性を理解できた。

まず、カリキュラムが国家カリキュラム、地方カリキュラム、学校カリキュラムの 3 つで構成され、国家カリキュラムが 80%を占めることがわかった。また、教員の種類が、研修教師（1 年目）、3 級教師（2 年目）、2 級教師、1 級教師、高級教師、特級教師とあり、研修を受けてスキルアップさせ、試験を受けて上位の資格を取得するシステムが、教師の資質の向上の原動力となっていると感じた。さらに、中国は英語教育に力を入れ、小学校 3 年生から授業が実施されており、日本より早期から聞き取りや話すことを中心に取り組まれてことがわかった。

中国の「資質教育」の目指すところと、日本の「生きる力」の育成を目指した教育は、本質的には変わらないと感じた。

池本利直……教職員の交流の大切さを説く教育部の方の話は、「教育交流は交流の原点である」という中国大使館の公使参事官の言葉と重なり、教職員交流への思いの深さを感じる。

また、多くの意見交換を通して、国家・地方・学校が一体となって、次世代を担う子どもの教育が着実に実践されていることを実感する。その一つの取り組みとして、今年度から導入されている学校評価制度（グリーン評価）は興味深い。学校の成績だけでなく、道徳・身体能力・自発的学習（趣味）・子どもの負担感という面から学校を評価し、社会への責任感等、全面的な育成を目指す取り組みである。これは、より良い成長を促すためのバランスのとれた子どもの負担に考慮した施策であり、日本の教育現場が抱える諸問題解決のための一案になるのではないか。

一瀬裕之……中国の教育について、申継亮氏に詳しく説明していただくとともに、参加者のたくさんの質問に丁寧に回答いただくことで、中国の教育の現状について、多面的に理解を深めることができた。特に、国家・地方・学校の 3 つのカリキュラムがあり、学校の独自性も認められていること、小学校の英語教育に力を入れおり、特に話すこと・聞くことに力を入れていることなどを理解できた。

宇土剛……中国国家の教育について、申継亮氏より、貴重な話を日本の教育と比較しながら聞くことができた。初等中等教育、カリキュラムの特徴（3 つからなっている）、授業の時数など。質問もできました。小学校の英語教育がいつごろからスタートし、週何時間で、何年生から行い、その内容は「聞く・話す・読む・書く」のどこに力を入れているのか。その答えは週 2 時間で、応用力に力を入れ、「聞く・話す」に力を入れているとのこと。この点は日本の外国語活動と同じであることがわかった。英語教育がスタートしたのは 2001 年。日本より 10 年早いスタートである。この差が今出ているとは思うが、焦らず、日本の外国語活動を目標にそってやっていくべきだと考えた。ここで聞いた話を頭に入れ、この後の学校の訪問につなげ、実際に確認できればと思いながら、中国訪問プログラムをスタートした。

於保孝一……特に印象に残ったことは、教職員の資質向上策の一つとして、能力別に分け競わせていることと、5 年毎の再認定制度である。そして、詰め込み教育から脱皮するために児童生徒に学校外での体験活動を奨励していることである。日本と同じように、指導力の向上と徳育の充実が課題であることが伺えた。

鈴木萌……中国の教育の現況と課題が明快に講義され、訪問団の質疑にも丁寧に答えてもらい貴重な時間を過ごした。中国での資質教育は、知識偏重型であったこれまでの日本の教育の将来にもヒントをもらえそうな内容であった。「学校に行くのは試験で良い点を取るためではない。教育部としてはもっと生徒に自由な時間を与えて総合的に育ってほしい」という言葉は、まさに現代の日本にも当てはまる。日本でも中国でも、こうした課題と視点を学校と保護者・地域が共有するためにはどうすればよいのか、考えさせられる。最後に申継亮氏が「交流があってこそ誤解がとける。教育交流が日中の友好関係の改善につながればいい」と話していたことに、強く同感した。

住田昌治……中国の教育行政のトップクラスの方々の話を直接聞けたことに感謝の気持ちで一杯だ。

また、大変詳しい説明で、教育の状況や教育改革の取り組みや課題がよく分かった。数多く出された質問にも、一つひとつ丁寧に、しかも詳しくお答えいただいたことに感銘を受けた。「交流を通じてお互いについて学び合うことが大切であり、誤解も解ける。両国の友好関係のために役立つことを願っている」という申氏の言葉が印象に残った。

橋本直……多くの人口、多様な民族、文化の中で、いろいろ課題を抱えながらも国をあげて国民の教育水準を向上させて経済的にも政治的にも文化的にも国際競争力を高めていこうという明確な目的のもと、教育施策を遂行されていることに大きな感動を覚えた。

久松千樹……中国政府の教育方針や施策について具体的に学んだことで、中国の教育におけるバックグラウンドをイメージすることができ、学校訪問時において大変役に立った。

英語の教科書を拝見させてもらい、授業内容はもちろん、各学年の到達レベルを確認することができ、長崎市が目指している小中 9 年間を通した英語教育に推進を進める上で大いに参考になった。

福島直美……近年の中国の英語力の高さは、小学校 3 年生から週 2 時間行いテキストや指導法なども確立されているのでしっかり学習が積みあがってできたものであることがわかった。小学生の間に基礎的なフレーズは読み書きできるため、中学生段階では更に積み上げられるのである。

教員の資質向上のために国が行っている研修、道徳の評価方法など、普段聞くことのできないことにも丁寧に答えていただけた。そのため、中国の教育システムのイメージが掴めた訪問となった。

前田成穂……中国教育部で詳細説明を頂き、以下のような中国の教育事情の知識を得ることができた。

- 2001 年から始まったカリキュラムでは、「国家カリキュラム」、「地方カリキュラム」、「学校カリキュラム」があり、国家が 80%、地方と学校を合わせて 20%となる。中国の高中（日本でいう高等学校）には、8 教科（語幹・文学、数学、人文・社会、科学、技術、芸術、体育、総合実践）あり、語幹・文学の中に、外国語（英語、日本語、ロシア語、ドイツ語の選択）、技術の中にはIT、農業、工業、サービス業の選択がある。
- 高等学校の取得単位数は 144 単位。そのうち必修単位は 116 単位。国家カリキュラムとして使用する教科書は検定教科書、地方は各支庁の許可がいる。
- 週の時間数は、中学校・高等学校が 34 時間、小学校は低学年 26 時間、高学年 30 時間である。
- 課題は学校の負担の軽減と塾での学習である。
- 「総合実践」は、高等学校で 23/116 の割合で、小学校・中学校は全体の 10%。内容は、労働や技術、科目の横断など。
- 中国の英語教育について、2001 年から強化した。小学校 3 年生からやっている。高等学校では、6 から 10%の割合で英語をやっている。生徒は留学志向が強い。英語の時間、教師はすべて英語で授業を行っている。教員は留学や帰国子女が多く、英語を使えないことの心配はない。
- 教員数は、1,000 万人いる。5 年毎に教師に認定試験をしている。5 つのレベルがあり、昇進や退職後の年金にも影響する。

森木浩介……日本の文部科学省に当たる中国教育部を訪問し、初等中等教育（幼児教育、義務教育、高等学校教育）、実情やカリキュラム、施策等について丁寧な説明を受け、質疑応答を行った。カリキュラムの 80%は国家により定められるが、残り 20%は地方と学校で決められること、教員研修は 5 年間ごとに 360 時間の国家研修が実施されること、英語教育を小学校 3 年生から実施し、近年特に力を入れていることなどが分かった。また、特別支援を要する児童生徒が増加するなど、特別支援教育に対するニーズが高まっている現状であり、特別支援学校や通常の学校の施設内にリハビリセンターを設置するなど対応する施策を行っていることが分かった。英語教育や特別支援教育など日本と同じ方向性で教育に取り組んでいることを感じた。

森田　康之……中国の初等中等教育について、その中枢にいる申継亮氏から話を聞くことができたことは、非常に貴重な経験であると感謝している。さらに、質疑の時間をたくさん確保していただくとともに、丁寧な対応をしてくださったので、本や資料、インターネットでは知ることのできない、中国の教育事情を知ることができた。これはまさに“交流”でしかかなわないことであり、素晴らしい経験の一つであった。

中国教育部にて中国の教育事情について詳しい説明を受ける。

日本教職員訪問団。左より橋本副団長、住田副団長。

甘粛省教育庁

[甘粛省蘭州市]　6 月 25 日(火)

甘粛省では、甘粛省教育庁副庁長の王萍(WANG Ping)氏より、高い水準を誇る甘粛省の教育と地方カリキュラムについての説明があった。また、併せて、その背景となる甘粛省の歴史・文化・特産品についても詳しい説明が述べられた。

プログラム第 3 日目午後、訪問団は甘粛省蘭州に到着した。16:00 より、宿泊ホテルの会議室にて、甘粛省教育庁副庁長王萍氏による「甘粛省の教育説明」の講義がスライドを使って行われた。

前半は甘粛省の概要の話にはじまり、歴史や文化財についての話があった。

講義には、甘粛省教育庁より張捷(ZHANG Jie)氏と張毅(ZHANG Yi)氏が列席したほか、蘭州理工大学から趙付立(ZHAO Fuli)氏が通訳として同席した。

甘粛省は広さ 45.5 万㎢、人口 2560 万人のうち 9.17%にあたる 235 万人が少数民族である。14 の地区に分かれ、裕固、保安、来多族の民族がいる。甘粛省の歴史は古く、紀元前 1 世紀にさかのぼり、唐の時代(7 世紀)には西アジアとの文化交流があったシルクロードの交易のルート上に位置する。多くの遺跡や石窟があり青銅器や彩陶なども多数発見されている。現在の甘粛省を代表するのは蘭州大学、世界的に有名な雑誌「読者」、ラーメンである。また石油工業、非鉄金属鋼鉄基地、衛星の発射基地があることでも有名である。甘粛省の初等中等教育は 2011 年に国家レベルの評価を受け成功している。教育を受ける人口の割合は 100%であり、小学校入学率は 99.56%、中学入学率は 97.67%となっている。高等学校は 436 ヶ所、44 万人、高等教育機関は 42 校ある。今後は就学前教育と高等教育を伸ばすことが課題という話であった。国家の課題でもあった地域での教育格差の問題は甘粛省にもあり、広大な土地からくる教師不足や教師の質が低いといった現状がある。そのため 2010 年～2020 年でどの地域も平均的に教育を発展させることが目標となっている。

1. 模範学校の設置
2. 農村部での教師の充実
3. 事務教育の保障

4. 教育の質を高める。

以下、甘粛省の課題と重点項目についての取り組みについて説明があった。

・高等教育と職業教育の割合を一対一にするということを推進し、現在では職業教育を重点的に行い技術者を育てている。
・継続教育としてコミュニティ教育や成人教育も行われている。
・少数民族の教育が遅れており、高めることに力を入れている。
・民間教育を奨励している。
・特殊教育が遅れている。

スライド終了後、団長の於保氏のあいさつがあり記念品の贈呈が行われた。あいさつの中で、「実は、今日(6 月 25 日)は自分の誕生日である。この日をここで迎えられたことは自分にとってとても嬉しいことである」と述べ、会場が沸いた。甘粛省表敬訪問の後、王萍氏の取り計らいで、大きなバースデイ・ケーキが夕食会の席に運ばれるというサプライズ・プレゼントがあり、全員で「ハッピーバースデイ・トゥー・ユー」を歌った。教育に関すること以外でも心が繋がった時間であった。

質疑応答

甘粛省教育庁では、副庁長の王萍氏が甘粛省の教育事情について、質疑に応えてくれた。

Q. 少数民族の教育について文化や慣習の違いに対して何か工夫はしているのか？(鈴木)

A. 甘粛省の場合、環境条件が厳しく(標高が高い、水不足)そのための特別な手当て(授業料や教科書の無償化)をだしている。バイリンガル教育が不足しており、専門の教師を養成し、村民生活が出来るよう寮を建設している。

Q. 民間教育の奨励とは？(橋本)

A. ここで奨励しているのは初等中等教育の部分ではなく、幼児教育や高等教育の充実をさしている。政府の力が及ばないところではどうしても民間に頼らざるを得ない。

Q. 特殊教育の現状について教えて欲しい。

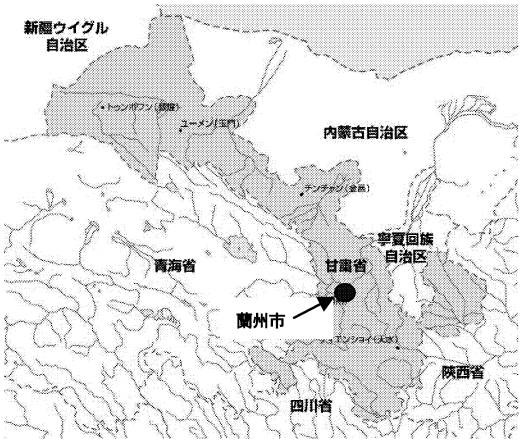
A. 現在、甘粛省には視覚、聴覚障害者の学校しかなく、今後増やさなければならない。昨年、西北大学に特殊教育の教員を養成する科を設置した。そこから 40 名の教員が育っている。

Q. 遺跡や文化を学校教育に活用しているか。(住田)

A. まず敦煌(中国甘粛省北西部にある世界遺産)を守るために遺跡の研究員がいる。その本部が甘粛省にある。西北大学、蘭州大学には敦煌を研究する科が設置されている。

(久保田　寛人)

甘粛省概要地図



雨量の少ない甘粛省では、植林などの環境保護活動が行われている。

《参加者の感想》

於保孝一……副庁長王萍氏より甘粛省の教育説明がていねいになされた。日本では考えられない少数民族の現状と教育課題があった。その教育課題が国家の課題でもある。教育格差が教職員や施設設備に大きく表れている現状があった。また、特別支援教育がやっと始まりだし、これからに期待するところである。3 日間 3 人に同行頂き、感謝の気持ちでいっぱいである。

川上恭子……・蘭州の説明をしていただき、衛星の発射基地があったり、世界遺産の石窟があったりと初めて知る内容がたくさんあった。また教育においては少数民族の独自の文化を守りながら、教育の遅れを

無くしていきたいという話も印象的であった。

佐藤真澄……中国教育部（中央）とは違う教育課題があると感じた。以下の 3 点である。①少数民族の集まりにより構成されているので、慣習や信教により、均一の教育が進められない②教師不足③水不足、乾燥等、自然環境の悪さに伴う教育への影響。

その対策として、学校づくりや授業料・教科書の無償化、教員の寄宿できる寮の建設、教員への特典の付与等が行われているという。中央と地方との教育の格差を感じた。生活水準が低いため、貧困の家庭も多く、幼児教育や高等教育を受けさせることができない。交流を通して、世界の教育事情を実感することができた。

鈴木萌……甘粛省の概要、歴史、産業について話を聞き、教育の現況の説明を聞いた。広大な国土をもつ中国では教育において、東西の格差、都市部と農村部の格差、また同じ地域の中での学校格差が問題となっている。甘粛省も例外ではなく、格差の是正に向けてさまざまな施策が行われている。中でも、少数民族への教育は重要であり、これまで工夫されてきたことが分かった。授業料・教材の無償化を早期に実現したり、教員不足解消のためにバイリンガル教育に力を注いだりと、ソフト・ハード面ともに改革が図られていたことが印象的だった。教育の平等性と少数民族の文化への理解の両立の難しさを感じた。

甘粛省教庁副庁長王萍氏から甘粛省の地方カリキュラムの説明を受ける。

左から、甘粛省教育庁の張毅氏、王萍氏、団長の於保氏、通訳の趙付立氏、甘粛省教育庁の張捷氏。

訪問当日が誕生日だった於保団長に、甘粛省教育庁から誕生日ケーキがプレゼントされた。

3.学校訪問

北京市第十五中学(中学校)
甘粛蘭州実験小学(小学校)
蘭州市第三十五中学(中学校)
西北師範大学附属中学(中学校)
西北師範大学第二附属中学(高等学校)
蘭州市城関区輔読学校(特別支援学校)

北京市第十五中学（中学校）

[北京市] 6 月 24 日(月)

学校長: 由邱（YOU　Qiu）
設立年:1952 年創立(昨年 60 周年式典)
児童数:約 2,000 名 / 教員数:約 250 名

北京市の重点中学であり、北京市で最初にモデル高級中学に指定された。理念は「教師と生徒がともにあり、強調して発展する。個性のもとに発展し、達成感と幸福な体験によって、主体性を確立させる」である。

創立 61 年の北京市第十五中学は、北京市内で文系に優れた学校として有名な学校である。姉妹校がオーストラリア、ドイツ、韓国、アメリカ、ノルウェーなどにあり、教師は、姉妹校でも授業をすることがある同校の 100%の進学率を誇る。また、校内には、本物の芸術に触れる機会を多く得る学校所有の博物館があったり、3 つの学生食堂があったりするなど、生活環境の面でも優れている。

そのほか、年 2 回の運動会や、中国国内のロボット大会で 6 年連続優勝するなど、学校行事も盛んである。

訪問当日は、副校長より学校の概要についてパワーポイントを使って学校概要説明や一般的な生徒の 1 日の流れなどの説明があった。

続いての質疑応答では「大学の進学実績に注目しているか、欧米の大学に進学しているのか」「学力を向上させる取り組みはどんなことをしているのか」等の訪問団からの質問に対し、第十五中学の教員からは「公立学校の進学について」「日本の大学の進学率について」等の説明があった。

その後、日中相互の教育システムやカリキュラム等について活発に協議を行った。

・教室で勉学を取り組む生徒たちの様子を視察。
・屋上から学校の全体を視察。リラックスできる屋上庭園がある。
・学校の博物館を視察。生徒 2 人から熱心な説明を聞く。
・正門で記念撮影、その後帰路(ホテルへ)につく。

（前田成穂）

《参加者の感想》

久保田寛人……進学実績も高く、高水準での教育が行われているのがわかった。校内に博物館を有しており、高等学校 1、2 年生でのボランティア教育の一環として利用しているとの説明をうけた。おそらく美術、歴史、道徳などの教科を多角的にとらえ、授業実践しているのであろう。また実際に作品の解説をしてくれた女子生徒のプレゼンテーション能力の高さにも驚かされた。

塩田貴子……北京市内でトップクラスの学校で、充実した設備をとてもうらやましく感じた。2008 年に設立された北京市初の中学博物館は学校の中とは思えない本格的なつくりで、毎年テーマを設けた展覧会も行われている。博物館の説明を行った二人の 1 年生は、学校独自のカリキュラムで選択した科目の授業で作品の歴史や説明のための知識や技術を学んでいる。充実した設備を授業のカリキュラムで有効に活用している。また、設備だけでなく、生徒たちの資質も素晴らしく、自習をしている教室に外国の訪問者が突然入ってきても、動じることなく集中して取り組んでいた。

鈴木萌……「自分の命の道で自分を探し自分を超える」という理念、「正直を守り誠実を築く」という校則は生徒だけのものではなく、教師もともに成長していくのだという考え方が大変興味深かった。多様な学校行事に、教師も指導の立場だけでなく自ら発表などしていた。

陸上競技場やバスケットコート、芝生が完備された校庭や緑化された屋上、カフェテリアなど、生徒にとっても教師にとっても最良の教育設備が整えられていた。のびのびと、かつ積極的に学業に取り組むことのできる環境であることが分かった。

米山宏……学校側からの説明ではなかったが、教

育部の馬氏によると、北京市内でも十指に入るレベルの学校だそうである。今回の訪中で初の学校訪問であった為、副校長からのありとあらゆる数々の話が興味深かった。とくに国際交流に力を入れている件は、本校と状況が似ており納得のゆくところであった。また、欧米の大学への進学希望については一番知りたい点であったが、案の定、近年希望が増えているということで、昨今ようやく日本でも叫ばれだした欧米大学進学については、中国の方が先んじていると言っても過言ではないと感じた。

教職員との意見交換会。左から2番目が副校長。

日中双方の教育現場の意見交換は、互いの理解を促進させた。

授業風景。試験を直前に控え、全員が真剣に望んでいる。

甘粛省蘭州実験小学（小学校）

［甘粛省蘭州市］ 6 月 26 日(水)

学校長：楊樺（YANG Hua）
設立年：1913 年
児童数：約 1,500 名 / 教員数：73 名

省が直接指導する重点小学校である。当初は「甘粛省第一師範附属小学」で師範学校の附設であったが、1936 年以降一旦、蘭州市の管理となり、1980 年に省の直轄に戻り、現在の校名となる。
21 世紀以降、学校は長い歴史と伝統的な文化と教育を基盤に、省教育庁の指導と社会各界の指示の下、「一人ひとりの教員と児童に成功を与える」という学校理念を受け継いでいる。

楊校長から学校概要について以下の説明を受けた。

・英語教育、英語研究室を設置、各学年に英語専任教師をおいている。
・省の教育庁が直接指導する重点小学校である。
・学内はインターネット完備、各教室と特別教室には ICT 機器が備わる。

1. 児童による取り組み説明
   ①絵画 ②英語のポスター作り ③記念式典のための小 2 作製の 127mの書道の巻物
2. 校史展室での学校案内。
- 今年で創立 100 周年、国や省などから 57 も賞状をもらう。
- 教育長や共産党のおかげで発展を遂げてきた
- 歴代校長、優秀教員の説明
- 教員研修の充実や有名教師
- 著名人による出前授業
- 外国との交流
- 読書に力を入れ（西遊記の俳優来校）
- 実験小学校教員を他校へ派遣
- 地震のための避難訓練
- 学期に一回の運動会

3. ラジオ体操見学＆休み時間校庭での交流
- 英語によるコミュニケーションをとれる児童が数多くいた。
- 児童は私服で大きな声で挨拶ができ、人懐っこい

4. 授業見学と教室説明
- パソコンの授業（イラストレーション）4 年生
- 国語の授業 4 年生
- 構内のLANサーバー、監視カメラのモニター室

・　図書室、卓球室、相談室、書道室
・　理科の授業
・　音楽の授業

5.　教職員との交流

校長楊樺氏のあいさつ、副団長橋本氏のあいさつ

質疑応答

Q. 保護者に授業をしてもらうこともあると聞いていたが、他にどんなことをしているか。（一瀬）

A. 家庭との連携として（1）授業内で学べない内容を子どもに教えたりしてもらう（2）授業参観を設け授業のアドバイスを聞く（3）入学式、卒業式に必ず一緒に参加してもらうなどを行っている。

Q. 相談室はどのような目的で使われているか。（大賀）

A. この教室は2、3年前に作られたばかりで、日本のほうが進んでいると思う。以前、四川省で日本人校長による研修があった。現在 24 人の先生が研修しているがいずれ全員の先生の研修が必要。担任と連携しながら児童の様子を記録している。

Q. 一年生から英語の授業をしているが 4 技能のどれに力を入れているか。（宇土）

A. 小学校1～2年生は聞く・話す、小学校3～6年生は聞く・話す・読む・書く。すべて小学校1年生より週 4 時間。英語コンテストで好成績。

Q. 学校の入学資格はどうなっているのか？（池本）

A. 公立のため地域で決まる定員以内であれば、関係者の子どもは入学できる。障がいのある子どもも受け入れる。

（川上恭子）

《参加者の感想》

荒岡格生……学校に入った途端、小学 2 年生が書いたという100m以上もある毛筆の巻物が展示してあり驚いた。掛け軸に書いてある毛筆はどれも立派な作品で、小学生の字とは思えないくらい見事なものばかりだった。優秀な先生、優秀な子どもは、徹底的に褒め讃えるような雰囲気が校内のいたるところで感じられた。

ICT の環境も整い、電子図書が 30 万冊以上ということや、大きなサーバーコンピュータと多数の監視カメラに驚いた。これだけの大がかりな情報管理とセキュリティ対策を学校でやっているところにも驚いた。

実験学校ということで、小学校 1 年生から英語の授業を週 4 時間行っていることや、英語教師が各学年に 1 名ずつ配置されているという。日本の英語教育に比べてかなり早い時期からの教育だと感じた。

短時間ではあったが、校庭で遊ぶ子どもたちと交流ができたことが良かった。話しかけてきた子どもたちは英語でしゃべりかけるなど、中国の英語教育の成果を感じた。臆せず堂々と話す態度と英語力はこれからの日本でも必要なことだと感じた。

宇土剛……今回の中国訪問のプログラムの訪問先で、私が最も興味のある学校であったのが、この小学校だった。中国教育部で受けた説明を参考にしながら、学校の様子を見てまわった。小学校の外国語教育がどれくらい進んでいるのかを知りたいという思いだった。重点小学校ということもあり、どの教科の設備も、子どもたちの意識も高いことを感じた。小学校 1 年生から 6 年生まで週 4 時間の英語教育を行い、3～6 年生は聞く・話すに加え、読む・書くにも力を入れていることがわかった。朝の英語での朗読時間もあるという。3 年生の教科書を見ると、日本の 5 年生の Hi Friends!のレベルであり、大変驚いた。ただ、この 4 時間をどのように教育課程に入れ込んでいるのかが気になった。日本の外国語活動と目標が大きく違っており、日本の外国語活動は、まだ、始まって 3 年であるが、今後、現在の目標がどのように変わっていくのかは気になる所である。ただ、今は、「聞く・話す」力を身に付けて目標としているコミュニケーション能力をしっかり育んで「読む・書く」という中学校の外国語科につなげていきたいと思う。

そして、日本の子どもたちは、技能面はともかく、コミュニケーション能力では、中国に負けておらず、豊かであると思う。

大賀俊彦……日本の学校との共通点が多く、教育の普遍的な部分を感じた。規律が重視されながらも自然な子どもの笑いが聞こえる授業展開、友達の発表を拍手でたたえる温かい学級づくりなどである。また、先生方が休み時間に率先して児童と遊んだり特技を披露したりする姿に、児童と共に成長しようとする教師像も日本と同じであると感じた。一方、50 人近い児童が集中して学習に取り組める規律のよさには目を見張った。中でも学級みんなで教科書を一糸乱れずに音読する姿はすばらしい。学校や授業に求められている目的がはっきりしているためであろう。「教育を、学校を、あるいは授業をこのようにするのだ。」という強い意志が、規律のよさの根幹にあるのだろうと感じた。

於保孝一……実験小学校と聞いて、想像していた

イメージと異なり、児童が生き生きと教育活動を行っていた。代表の児童が迎え、堂々と学校の説明をしてくれた。他の児童も運動場で話しかけると表情が豊かで、コミュニケーションをとることができた。そこには自信に満ちあふれた本校の教育、発展する現在の中国のエネルギーを感じた。そして、学校現場でも相談室の工夫等に特別支援教育の導入を感じた。

川上恭子……生徒の取り組みが英語のポスターや書道の内容でしっかりとわかった。また、実験小学校の歴史を説明していただき、国として力をいれている学校ということがよくわかった。設備がしっかり整い、英語教育も小学校1年生から週4時間取り組んでいるということで、生徒と英語で交流できたことが新鮮だった。またラジオ体操が軽快なテンポの音楽なのが印象的だった。

久保田寛人……最初に校内見学および生徒の活動をみせてもらった。校庭で生徒たちと触れ合うことができたのが有意義な経験となった。まずこの学校で驚かされたのは生徒の能力の高さである。展示物はどれもレベルが高く、小学生とは思えない英語ポスター、127mの巻物など信じられないものが多数あった。設備も充実しており、各教室にプロジェクタの設置はあたりまえで、電子書籍、校内 LAN、監視カメラの専用モニター室もあった。公立小学校とは言え重点学校になるとこれほどまでに力をいれているということがなによりも驚きである。

佐伯貴昭……校門を入るとすぐに大きなモニターに映像が映し出され、児童の立派な作品が目に飛び込んできた。その作品の説明をする 6 年生(卒業生)の堂々とした態度に感動した。次に、校史展室に案内され、学校の歴史や数々の表彰、学校生活の様子について説明を受けた。何より、学校の中にこのような展示スペースが確保されていることに驚いた。校庭に出てみると、ちょうど業間体育のような体操の時間。先生の指導のもと、どの子も生き生きと体操をしていた。体操が終わると、休憩時間となった。バスケットをしている子どもたちと触れ合い、英語で会話をすることができた。どの子も物おじせずにきちんとした英語で受け答えをしてくれる。聞けば、英語は 1 年生から週 4 時間の授業が組まれ、毎朝英語の朗読をしているという。日本では小学校 5、6 年生からの外国語活動が始まったばかりであり、先進的な学校とはいえ、日本の小学校と比べてレベルの高さを感じた。

佐藤真澄……英語教育は1年生から始まり、3 年生には、日本の 5 年生の内容に取組む。どの学年にも英語専門教員がいて、人的な環境も整っていた。日本は、小学校5年生から教科として「小学校外国語活動」が始まる。中国では、英語を話したり、伝え合ったりする仕組みが早い段階から始まっている。小学校外国語活動における授業の充実が、必要である。英語で伝えた喜び、英語で表現する楽しさを感じさせるために、外国人講師の活用等が大切である

鈴木萌……充実した設備の中で、児童がのびのびと成長しているのが分かった。見学した朝の体操の風景は、児童がみんな規律正しく動いている印象を受けた。一方で、休み時間は子どもらしくはつらつとした雰囲気だった。英語教育がかなり発展していたことに驚いた。記念館を見学したときに、避難訓練の写真が展示されていた。防災教育として、どのような取り組みがあるのか聞いてみたかった。

住田昌治……ESD スクールとして、先進的な取組がされている。教育環境の整備が素晴らしい。子どもたちが、気持ちよく過ごせるように気が配られている。授業間に行われた全校での集団行動・声を出しながら行う全校体操は圧巻だった。子どもたちにとって望ましい環境について考えられていて、その持続可能な環境の中で過ごすことで、子どもたちに持続可能性を身をもって感じさせるようにしていた。こういう考え方も日本には少なく、参考になった。

橋本直……中国の小学生と初めて交流をもつことができた。すばらしい教育環境の中で、伸び伸び明るく活動する子どもたちを見ることができた。友だちや先生方と一緒に遊んでいる子どもたちの生き生きとした表情は、日本の子どもも中国の子どもも共通するものだと実感した。このような表情が自校でももっと多く見られるように私たち教師は精進しなければならないと思わせてくれる子どもたちだった。

久松千樹……運動場にいる児童と自由に交流できる場面において、簡単な手品で興味を引きつけたことで、気軽にたくさんの児童が私に話しかけてきてくれ、それぞれの英語力を図る絶好の機会になった。また、小学校 1、 2 年の英語の教科書をいただき、長崎市が目指している小中 9 年間を通した英語教育に推進を進める上で大いに参考になった。

福島直美……門を入ってすぐのところから、児童によるさまざまな作品が並び、小学校における教育レベルの高さが伺えた。大人数での学習は進めるのが困難だろうと思っていたが、どの教室も活気に満ちた授業が行われており、児童は教師の指示を素直に聞いて行動していた。教師が細やかに行わなくても、児

童は問題行動を起こすことなく積極的に学習を進めていた。休み時間には児童と話したり遊んだりしたのだが、英会話力の高さに驚いた。実際の学校現場に触れることができたのは大きかった。

前田成穂……3 人の小学生が出迎えてくれた。堪能な英語での説明があった。1 年生から 6 年生まで、英語を週 4 時間程度やっているとのこと。「英語が上手だね」と言うと、「中国語、数学、英語はとても大事な科目だから」と英語で答えてくれた。「将来は何になりたいの」と聞くと、一人は「作家」、もう一人は「英語の教師」と言っていた。他の生徒にも聞く機会があったが、ほとんどの生徒が英語で会話ができた。赤いリボンをつけている子どもがいたので、理由と聞くと、革命解放の印という。式典などでは全員がつけるらしい。夏は暑いのでつけなくていいらしい。
入学試験はないという。訳がわからなくて、詳しく聞いても伝わらない。疑問を感じながら学校を去る。

森木浩介……校門を入ると絵画や習字等の作品が展示してあり、出迎えた児童が中国語や英語で説明してくれ感心した。どの作品もすばらしいできばえで感心した。

日本の授業間に当たる休み時間には、児童が運動場に集合し、ラジオ体操を行っていた。1,000 人を越える児童が学年ごとに整然と整列し、元気に体育する様子は迫力があり壮観であった。 その後の休憩時間に児童と交流することができた。子ども達は人なつっこく、右手をあげて「ハオ（こんにちは）」とあいさつしてくれる。

また、英語でコミュニケーションをとれる児童が多く、英語教育の充実ぶりがうかがわれた。実際、当校では、低学年から週 4 時間、英語専門の教員が指導しているとのことであった。

授業参観をしたが、どの教室も児童数は 60 人を越えているが多さを感じさせない、整然とした雰囲気の中で授業が実施されており、学習に集中し、ひたむきに取り組んでいる一体感に感銘した。

森田康之……自分が小学校籍でもあり、児童の人懐っこさにも助けられ、多くの児童とかかわることができたことは、プログラム中で一番楽しい時間であった。片手をあげての元気な「老師、早上好（先生、おはようございます。）」の声は、これからも忘れることがないと思う。

米山宏……実験小学校というだけあって、ハード・ソフト両面でそれなりの投資を受けているようで、1 学級の人数の多さを除けば、特にハード面では日本の平均的な小学校よりはるかに先進的であると感じた。これだけの学校なので入学希望者が殺到しているのでは、という疑問に対する学校側の説明では、義務教育段階なので地区の生徒を優先的に入学させるが、定員に余裕があれば関係者の子弟であれば入学できるとのこと。実際にどれ程の割合で地区外の生徒が入学できるのか知りたいところであった。

陽校長(右)と ACCU 島津正敷事務局長(左)

訪問団を驚かせた 100m以上もある児童の作品。

蘭州第三十五中学（中学校）

[甘粛省蘭州市] 6 月 26 日(水)

学校長:彭偉 (PENG Wei)
設立年:1978 年
児童数:1,673 名 / **教員数**:114 名

中国ではスタンダードな初級中学。校内には整った設備がある。2003 年から 5 年連続で蘭州市の教育質量優秀賞を取得、省・市の重点中学から入学する生徒も多い。優秀な教員陣を確立、全面的な資質教育のために教育教学の品質を高めている。

男女共学 28 クラス、教員数 114 名。学校敷地面積が狭いため施設の効率化に努めている。
毎年、蘭州市教育庁より表彰されている。
校訓 「篤学」「善思」「明理」「守城」
＜授業・校内見学＞

- 見学した授業:体育、クラブ活動(太極拳)音楽、情報技術、歴史、物理、書道、創作芸術、体操
- 見学した施設:運動場、PC 室、物理実験室、科学実験室
- どの教室にも PC プロジェクタ(天井に設置)スクリーン等の ICT 機器が完備されている。また、体育以外のすべての授業で ICT が活用されている。とりわけ創作芸術の教室には生徒が検索できる PC が教室の横に設置され、自由に使えるようになっている。PC 教室も2教室ある。生徒は姿勢がよく、真剣なまなざしで授業を受けているのが印象的であった。
- 日中教職員交流会

(1)彭偉校長より学校紹介

- 校章は伝統的文化と 35 の文字をデザインしている。
- 2001 年より蘭州市の標準中学となる。
- 理念:学生の明るい未来を準備する、入学時より笑顔で過ごす。
- 校長の言葉:すべての時間を利用し、何事も良くできるように。笑顔で胸を張って。未来に向かって。
- 発展のための 3 の目標:近代的環境、素質のある教師、学生の養成
- 教師の質を高めるために、授業見学や交流等の強健活動、専門的な研修講座、若手教師の育成、コンテスト等をおこなっている。教育以外の活動(出し物、パーティなど)も行い、教師のメンタル面にも配慮している。
- 子どもたちに自信を持ってもらい、独創性、創造性を育成する。
- 生徒の学力の差が大きく、習熟度別クラス編成もある。勉強嫌いや家庭の問題を抱える子もおり、メンタル面でケアのため心理相談室もある。
- 国際交流として、外国人に来校してもらう交流、米国へ生徒を派遣するバスケットボールチーム(女子)の国際試合等がある。

(2)住田副団長よりあいさつ

(3)質疑応答

Q. 教育計画を立てるときの手順と留意点は？(森木)

A. 公立なので、政策と法律に基づいている。国家カリキュラムに基づき、学校の目標に照らし合わせて作製している。学校の発展目標、保護者の期待、教職員の意見を取り入れながら、毎学期計画的に手を加えている。(副校長)

法律に従う、各学年の目標は1年生:振る舞いの仕方 2 年生:学習習慣 3 年生:正しい価値観とする(校長、補足)

Q. 生活面でどういう指導をしているか、一年生の「振る舞い」を具体的に教えて欲しい。(一瀬)

A. 小学生から中学生へのギャップが大きい。新しい学校環境、先生、教授法への適応力を校則により定めている。中 1 で髪型、服装の決まりを厳しく教える。長髪や茶髪があった場合、話しあいにより指導していく。(校長)

Q. 小学校との情報交換、交流連携は？(於保)

A. 中学校 1 年生の担当教師と小学校 6 年生の担任が年 1 回の交流会をもつ。中学校 1 年生のギャップを埋めるため入学後のテストにより配慮していく(校長)小中一貫の学校もあるが少ない。小学校と中学校の連携が大切だが、まだ進んでいない状況。小学校と小学校、中学校と中学校の連携の方が多い(第三十五中学局長)

Q. 意思が強くなる教育(たとえば、冬に薄着で過ごす)は行われているか(第三十五中学局長)

A. 思いやりをもって過ごしましょうという教育は行っている(住田)

(佐伯貴昭)

《参加者の感想》

池本利直……「中国の夢を実現するために、より

良い環境づくりに努めている」との校長の言葉どおり、パソコン導入や実験教室の整備等、物的環境が整えられ、子どもたちが活発に学習している姿がある。夢を持ち、夢を実現するための最初の一歩を考え、取り組む教育の在り方は両国間、共通のものがある。そのために、「すべての学生に対して、個性を伸ばし、すべての時間を利用して、未来に向かってがんばっていこう」という熱い教育への思いに、子どもたちの夢の実現と中国の夢の実現の確かな可能性を感じる。

また、夢を実現するために、通常の初級中学（日本における通常の中学校）において、日本における特別な教育的ニーズを必要とする子どもたちへの取組と同様に、保護者からの願いを受けて発展目標（個別の目標）を作成している点は驚きである。ここにも、中国における教育への傾注を感じる。

一瀬裕之……日本と中国との共通性を感じることできた。中国にも「中学校1年生問題」が存在し、対応するために小中の教職員の情報交換や連携が行われていた。また、中学1年生の時に、「ふるまい」の指導を行い、校則や基本的生活習慣の徹底を図っている点が、日本との共通性であった。小学校と中学校の連携については、不十分な点も多く、もっとお互いの授業を参観したり、協議する時間を確保する必要があるという意見も出された。日中両国の共通性のある課題である。

佐伯貴昭……小学校とのギャップを埋めるために、中学 1 年生で「ふるまいのしかた」を目標に掲げ、髪型や服装のきまり、学習の態度をしっかりと教え、学年が上がるにつれて正しい価値観を持つように教育を進めているところは、日本の中学校と共通した部分である。教師誓詞や学生誓詞を定め、統一した取組がなされるようになっている。生徒の学力差や勉強嫌い、家庭の抱える課題にも言及があり、習熟度別編制授業や心理相談室の開設など、日本と同様の課題もある。日本との大きな違いは、1 クラスあたりの人数が 60 人と多く、教室でも身動きができないほどであるが、授業に対する真剣なまなざしや態度はすばらしいものがある。また、この学校でも生徒たちは私たちの質問に対して、堂々と答えてくれていた。

鈴木萌……生活指導の在り方がとても興味深かった。入学当初に適応力を養うために、ヘアスタイルや服装のきまりを細かく指導するとともに、学習習慣も身に付けさせるということであった。1,600 人を超える生徒に対し、どのように指導を徹底させ、どのような基準できまりをつくっているのか気になった。毎日の授業後に全校で体操を行っているのも印象に残った。心身の健康はもちろん、一体感を生んだり規律の精神を育成したりすることにも役立っているように思った。

森木浩介……訪問と同時に 1 年生の体育の授業を参観した。体格がよく、運動量豊富に、きびきびと活動しており体育に力を入れている様子がうかがえた。その他、歴史、物理、音楽、総合芸術等の授業を参観したが、どの授業も学習規律がよく、生徒の学ぼうとする意欲が強く感じられた。各教室には、パソコン、プロジェクタなど ICT 機器が完備されており、電気実験室や化学実験室など教科の領域に応じた特別教室が整備されているなど施設や設備についても充実していることがうかがわれた。授業参観後に、生徒との交流の時間を設定していただいた。英語を通しての交流であったが、楽しく充実したひとときを過ごすことができた。学校や家庭での生活、将来のこと、日本の文化や中学生の様子等についての情報や意見の交流を行ったが、進んで伝えたり尋ねたりする様子から英語力、コミュニケーション力の高さを感じ、国際理解教育に力を注いでいることが実感できた。

活発な意見交換が日中の相互理解を促進した。右奥から2番目が彭校長

生徒の自立と個性を伸ばす総合芸術の授業風景。

西北師範大学附属中学(高等学校)

［甘粛省蘭州市］ 6 月 27 日(木)

学校長:劉信生(LIU Xinsheng)
設立年:1901 年
児童数:約 1,200 名 / 教員数:約 80 名

北京「五城学堂」を源流とし、甘康省教育庁から初めて省クラス重点中学に指定された。「勤慎誠勇」の伝統によって、5000 名以上が省クラスの学科コンテストや各種の評価活動で受賞するなどこれまで優秀な人材を輩出してきた。国際資質を持つ人材の育成に力を入れている。

出席者:劉校長・書記・副校長 2 名・国際センター長

- 「勤・慎・誠・勇」
- 「SCIENCEを支えているのはHUMANISM」の建造物
- 国際部がある。

校長による概要説明

- 国際部の目的は留学生の受け入れや海外大学への入学支援のためである。

副校長による概要説明

- 寄宿生:自宅生＝1:1
- 寄宿生の一日の流れの説明 6:30 起床 7:25 登校 23:00 消灯(この間 2 回の体操 40 分授業 最後の一時間は学活)
- 生徒指導面で課題のある生徒は少ない。
- 寄宿生が学校生活に慣れない場合は、相談者を配署したり、保護者と面談を行ったりしている。また、教職員の研修も行っている。

主任による概要説明

- 学期は前後期の 2 学期制
- 評価は月末と学期末に行っている。

質疑

- 欧米大学志向になっているのは、大学進学のために英語の指導に重点をおいているため。日本への留学も増えてほしいと考えている。

校内見学

- 知漢堂見学→校内散策→古生物標本室見学→科学→技術館見学→中学教学楼前にて写真撮影→歴史館見学→体育館見学(バドミントンにて交流)

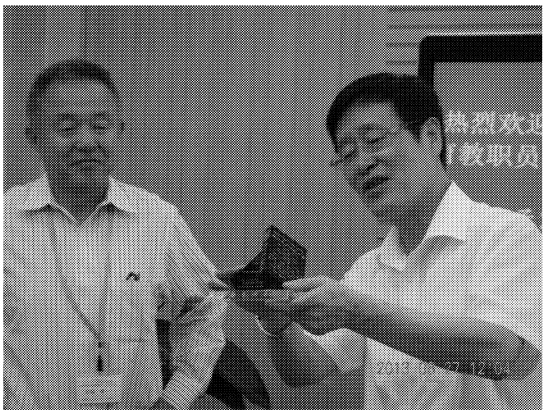
昼食

- 学生食堂にて昼食

(森田康之)

《参加者の感想》

鈴木萌……半分の生徒が寮生活であり、朝から夜まで学習の時間が十分に確保されていた。キャンパスはとても広く、設備がかなり充実していて、そういった環境だからこそ、多くの生徒が意欲的に学習に励むことができるのだろうと考えた。
国際交流に力を入れていることも印象深い。国際感覚を育て、世界に通用する人材を輩出しようとしているのがよく分かった。



学校の理念を表したレリーフが劉校長(右)から贈られる。

広く、緑の多い校庭

学生とバトミントンで交流する訪問団。

西北師範大学第二附属中学（中学校）

[甘粛省蘭州市] 6 月 27 日(木)

学校長: 窦継紅 (DOU Jihong)
設立年:1978 年
児童数:約 1,100 名/ 教員数:76 名

有名高等学府である西北師範学校の校内にあり教員のレベルが高く、学校設備は整っている。「生徒主義」の教育概念により、「すべては生徒のため、すべての生徒のため、生徒のすべてのため」を業務基準とし、全面的に資質教育を実施している。

(1)教職員交流会

①校長より学校紹介

・基本データ 1978 年創立
・「同振共鳴、和諧友展」という理念。
・エコロジー教育が理念の一つ。
・体育・音楽のセンスをもつ学生を養成。
・17 クラス、1,100 名の生徒
・教職員 76 名(最低でも大学卒業、特級教師 2 名、18 名の先生が受賞経験など。)
・西北師範大学より教師が招かれ、同校でも教鞭をふるう。
・中国全土に影響を与えることのできる学校づくりをめざす。
→学校のハード面、生徒の質などが評価されこれまでに多くの表彰を受ける。
・高校入試の成績も省でトップクラス。
・校庭 2 ヵ所、面積は広くない。
・心理相談室あり。
・読書に重点
…週 1 で授業、校内に読書コーナーあり。
・各教室にメディア設備あり。
・教員養成に力をおく→省と協力・研究活動も行う。
・全国の教師が来て、研修を受ける。
・新しい学年では入学式…結束力を固める。
中学 3 年次での卒業式…優秀な生徒には賞状、奨学金→母校への誇り、愛校心。
・「教師の日」…卒業生が多く来る。
・教学シンポジウム
…大学の講師や保護者が講座を毎年開く
・国家研修計画…授業評価等行う。
・科目コンテスト…物理・英語・科学で多く受賞している。
・芸術文化祭…年に 1 回。書道・手芸などを展示。合唱も市で受賞している。
・スポーツ文化祭…ラジオ体操なども。バドミントン大会でも市で入賞している。
・運動会…年に 1 回。生徒全員参加。
・冬季はマラソン大会がある。
・国際的視野を広げるため、教員が各国へ。その他、外国からも教員を招き交流会。生徒もサマーキャンプ・韓国訪問など。
・マナー教育…責任感・一人前になるため。
・地方の生徒を招き、ホームステイ。授業・部活にも参加。
・英語技能コンテスト、詩の朗読活動、安全教育なども実施している。
・クラス単位で「文化建設」
→各クラスの特色が表れる。

②於保団長先生より挨拶

③各メンバーより自己紹介

④ 質疑応答

Q. 学校・保護者・社会が三位一体となって行う徳育教育の内容とは？(前田)

A. 徳育教育を第一に置いている。学校が唯一の場ではなく、例えば生徒によっては学校・家庭・社会がすべて影響する。保護者も教育会議に参加したりと、共通の目的に向かって協力する。保護者に教育方法を指導。

Q. エコロジー教育はどのような取り組みで、課題は何か。(福島)

A. エコロジーとは自然の形。学校内の資源・エネルギーすべてに関わる。授業文化からいうと、芸術の一つである。エリート教育からの転換でもある。問題提起してから、時間をかけて生命の成長を見る。現代は情報化がすすみ、そういったことから離れているようにも思う。人間と自然の調和をめざし、生徒が植物・動物とふれ合うことを大切にする。

Q. 物理・化学・生物・地学の割合は？環境教育はどのくらい重点を置いているか。(塩田)

A. 国家カリキュラム・地方カリキュラム・学校カリキュラムに基づいている。学年ごとに科目が決まっている。

⑤記念品贈呈

(2)授業・校内見学

・英語・美術・音楽の授業を見学。音楽では、生徒が

一人前に出て面白おかしく説明をしていて、クラスが盛り上がっていた。

・心理相談室を見学。箱庭が用意されている。奥には、ソファなどが置かれ、リラックスできる空間がつくられていた。

(3) 教職員・生徒交流会

・第二附属中学の先生 5 名、2 年生の生徒 12 名。

・英語でのフリートーク。

日本語が堪能な生徒がいたのが印象的。日本のアニメが好きで、自分で勉強したという。

→全体として、素朴で人なつこく、親しみやすい雰囲気の生徒が多かった。(日本の公立中学と似ている)

(鈴木萌)

《参加者の感想》

荒岡格生……甘粛省のトップクラスの中学校で、各教室にプロジェクタが設置され、パソコンが教卓に組み込まれていた。そして、どの授業でも教師がきちんと活用しており、ICT 環境の整備だけでなく、全ての教師の ICT 活用能力も高いことがわかった。

優秀な生徒を表彰して奨学金を与える制度があるということや、芸術や科学コンテスト、各種スポーツ大会で素晴らしい成績を収めていることがよくわかった。一方で、子どもたちの心理的負担が大きくストレスが多いためか、心理相談室があり、整備されていたのか印象的だった。

最後に中学 2 年生との交流があった。日本が好きで、日本語を学習しているという女子生徒がいて、流暢な日本語で答えてくれたことに驚いた。また、それが独学で 1 年程度ということで、更に驚いた。よく話してみると、日本のアニメが大好きで、興味や関心等は日本の普通の中学生と同じと感じた。日本の普通の中学生と比べると、将来の夢や希望をきちんと描いていて、それに向かって努力を続ける力をもっており、素晴らしいと感じた。

一瀬裕之……生徒とコミュニケーションを図ることができ、とても楽しく充実した時間を過ごすことができた。生徒は明るく活発で、コミュニケーション能力も非常に高かった。特に英語でのコミュニケーション能力は、日本の高校生レベルであると感じた。「手をつなぎ、心をつなぐ」「ふるまいは知識よりも大切」という言葉は、日本の教育との共通性を強く感じる言葉であった。

大賀俊彦……日本の中学校の様子に一番近く、日本の国際理解教育あるいは英語教育の目指すべき姿を見ることができた学校である。訪問の最後に、グループに分かれ、中学生と交流する時間が設けられた。私は日本の先生 4 人と附属中学生 2 人とのグループとなった。話題はドラえもん、AKB48 のほか、学習時間や休日の過ごし方など多岐にわたった。感心したのは、中学生 2 人が英語を話せることではなく、私たち大人の意を酌み取りながら、英語やジェスチャー、絵、漢字による筆談など、あらゆる手段で、自分たちの意見を伝え、私たち大人の意見をわかろうとしてくれたことである。第二附属中学では、海外の学校との交流の機会が大変豊かで先進校であることは間違いないが、「伝わらない、わからないからやめとこう」ではなく、「自分の考えを相手に伝えたい、相手の考えを分かりたい」という、コミュニケーションに対する意志の強さは大いに学ぶべきである。

川上恭子……1 クラス 50 人以上でもしっかりと授業に集中している様子が印象的だった。
生徒と交流し、日本と中国でぜひ交流したいとお互いの意思を確認することができた。また日本の中学生に対して英語で自己紹介をしてもらい、それをビデオに納めることができた。

今回の学校訪問では私の担当教科「技術」の授業見学はなかったが、ここでは情報教育を担当する先生がちょうど記録映像撮影のために同行していたため、情報教育の授業の様子や使用する機器やソフトについての情報交換ができ、大変有意義だった。

久保田寛人……生徒の元気のよさが印象的であった。多くのコンテストに参加しており、好成績を挙げている。また教員の研修も多く学校全体で教育レベルの高さがうかがえた。校内見学後の生徒とのディスカッションの時間(10 分のところ 50 分)を多くとってもらい話を聞いたことが大変有意義であった。中学 2 年生の女子 2 名と英語を交えて話をしたが随所に彼女たちの学習への熱意を感じ取ることができた。

佐伯貴昭……中国では生徒や教職員との直接的な交流はあまりできないと思っていたが、この学校では授業見学の後で、生徒や教職員と交流する時間を十分に確保していただいた。日本のアニメを見て独学で日本語を勉強したという生徒もおり、英語と日本語を交えてコミュニケーションをとることができた。生徒の将来の夢や学校生活・家庭生活のことなど直接意見を聞くことができ、日本の中学生と同じだなと思うと同時に、ここでも物怖じせずに堂々と意見を述べる姿に感動した。また、この学校は読書にも力を入れて

おり、週1回の読書の授業と2階と3階に読書コーナーを設置し取組を進めている。

佐藤真澄……エコロジー教育、人文科学教育、徳育教育に力を入れている学校だった。中学 2 年生の生徒 2 名と会話をし、交流することができた。中学生の英語能力に驚いた。また、将来の夢を「数学者」「CEO（最高経営責任者）」と話し、明確な目標に基づき学習する意欲やコミュニケーション能力に長けていると感じた。日本では、英語教育の充実、将来に向けた活力を育む教育の推進が必要である。

塩田貴子……子どもたちは明るくはつらつとしていた。体育大会や文化祭などの行事は生徒主導で活動が成り立っており、生徒の自主性がうまく生かされる場となっていた。生徒は家庭学習の時間をしっかりととっていた。毎日たくさんの課題が出されて大変だとこぼしつつも、海外留学の希望や将来の夢や目標をそれぞれ持っていて、未来に向かって努力を惜しまない姿勢が感じられた。学校の取り組みにおいても、夏休みの学生サマーキャンプや農村との交流など、生徒の視野を広げるための活動が積極的になされている印象を受けた。

鈴木萌……教員の養成に力を入れていて、多くの成果を上げているのが分かった。生徒はもちろん、教師も共に育ち、さらに保護者も教育会議に参加するなどして指導の方法を学んでいるというところは、これから日本の教育にも生かせるのではないかと考えた。校内を見学した後、生徒と交流の機会をもった。生徒の雰囲気は素朴で親しみがあり、心なしか日本の公立学校に似ているように感じた。

住田昌治……学校経営方針の重点が子どもたちの育ちの状況に合わせて設定されていた。今は、4番目に取り組んでいるということだったので、段階かと思ったが、並列ということだった。また、環境教育についての質問に対して、ESD の視点から素晴らしい回答をいただいた。あまりのうれしさに、お答えになった先生と直接コンタクトをとらせていただき、私が感激したことを伝えた。この出会いを大切にしたいと思った。英語での会話に訪れた生徒たちが、一生懸命質問したり答えたりしている姿を見て、どこの国でも子どもの可能性は限りないと感じた。こういう時にも、相手のことを知り、相手のことを思いやりながら関わっていかなければならないことを実感した。

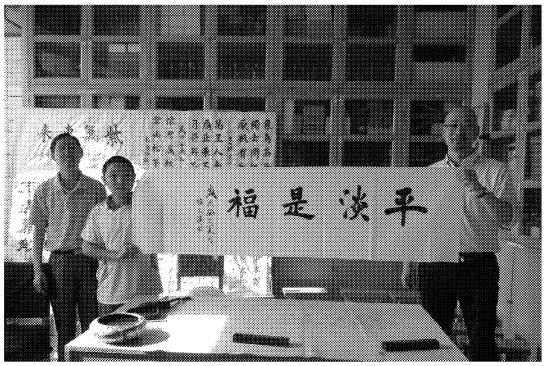
久松千樹……中国の学校現場で、英語教員及び中学生と英語で意見交換ができたことは何よりの収穫であった。「1人っ子政策について」「部活動について」「将来の夢について」「中国と日本の教員の違いについて」等、生の考えに触れたことで、私自身が日本を客観的な視点で考えることができた。

中学2年生の英語の時間において、飛び込み授業をさせてもらえたことは忘れることはできない。5～10分程度であったが、私の専門である英語で交流できたことは至福の喜びと言える。

福島直美……「中国全土に影響ある学校づくりを目指す」という言葉通り、さまざまな点において熱心に取り組んでいた。校内環境は非常に整っており、各教室にメディア設備の設置、読書コーナーの開設など生徒がすぐに活用できるようになっていた。同時に、教員養成に力を入れており、高学歴の人材を採用するだけではなく、省と協力した研修を行っていることで、授業レベルの向上に努めていた。生徒の学習意欲も高く、競争社会の中で自分の夢をしっかりもちながら日々学習にまい進しているのだそうだ。生徒にとってやらされる学習ではなく、自分がやりたくなるような学習を展開していることが素晴らしかった。

米山宏……直接生徒と交流の持てた唯一の学校である。男子生徒 2 名と話をした中で特筆すべきが、彼らの最初の質問が「日本の生徒も我々のように勉強のプレッシャーを受けているのか」というものであった事である。噂通りにかなり勉強漬けの毎日を送っているようであった。その成果か中学 2 年生にしては英語が達者で、日常会話なら困らないレベルであった。自分の夢をしっかりと語り、重圧を受けながらも将来のためには努力をしなければならない事をしっかりと理解をしている点が健気でもあった。

訪問団と生徒のフリートークの一場面。



書道で交流。中学１年生の生徒(左)の書。

記念撮影。最前列左から５番目が**校長**。

学校の校門前で。笑顔で握手を交わす。

蘭州市城関区輔読学校（特別支援学校）

[甘粛省蘭州市] 6 月 28 日(金)

学校長:楊永霞(YANG Yongxia)
設立年:1996 年
児童数:159 名/ 教員数:29 名

・甘粛省で最初の知的障がい児童が教育を受ける専門機関。
・甘粛省で唯一の障がい児童への知的教育とリハビリ訓練を行う 9 年制の義務教育・半寄宿の学校。
・2005 年に現在の場所に移動し、学校のハード面は大きく改善。街中のビルが学校になっていた。
・児童生徒の顔写真の撮影禁止。人権配慮。

出席者:楊校長、何教務、白担任、楊担任

1. 楊校長あいさつ・概要説明
   - ・1996 年正式設立(2005 年現在地に移動)
   - ・敷地面積 1626 ㎡、建築面積 2700 ㎡、校庭 1350 ㎡
   - ・教職員 29 名(男 5、女 20、養護 4)、平均年齢は 39 歳。
   - ・児童生徒 159 名(男 102 名、女 57 名)、11 クラス 90%以上の児童生徒が中・重度で、知的・言語・ 自閉症等の障がいをもつ。
   - ・理念は 「人として生徒の将来の生存と発展」。つまり、教育活動やリハビリ訓練を通じて育ち、社会で生存すること。
   - ・カリキュラム・時程等
     朝 8:00～16:00 6 時間の授業
     教科…生活国語、生活数学、生活能力、生活美術、生活音楽、生活手づくり、生活体育
   - ・毎週火曜日と木曜日の午後は、知的能力や興味・関心(縫製、美術、料理、体育、おもちゃ等)によって、特別な授業をする。子どもは 18 グループに分ける。
   - ・考査 国の方針に従う。10 の領域。
     安全、コミュニケーション能力などを加味して成績を出し、それによって来学期の計画を立てる。
   - ・月ごとに教育のテーマがある
     4 月「幸せを感じる」、5 月「体育祭」、6 月「楽しい 6 月」、9 月「礼儀・マナーを学ぶ」、10 月「一日他者を助けよう」、11 月「法律について学ぶ」、12 月「社会への感謝を考える」。
   - ・夏・冬休みに児童生徒が住んでいる地域の活動

に参加する。

・毎学期 1 回、クラスごとに社会で他者とコミュニケーションをする活動を行っている。 社会で生存（生活）し、他者とコミュニケーションする能力を育てる目的である。

（例）病院や市場へ行く、バスに乗る、一般の家でご飯を作る

・児童生徒は省・国を代表してよい成績を収めている。区レベルのいろいろな活動に参加し、合唱チームはよい成績をとっている。

・甘粛省の特殊教育は現在、発展の途中なので、いろいろとアドバイスをお願いしたい。

2. 橋本副団長あいさつ

・特別支援教育は子どもの社会的自立に向けた支援の根本である。

3. 質疑応答

Q. 学校の雰囲気がよい。限られた予算・人数でどんな工夫をしているのか。(池本)

A. この学校の先生は、まず子どもを愛する。先生や保護者の人脈を利用して、生徒のために活動している。ここは（リハビリの）専門の先生は少ない。各領域で優れた人たちで、リハビリ専門の先生はいない。実習と研修を通じて技術を学ぶ。

Q. 共生社会をつくるために、職業訓練教育をどのようにしているのか。（住田）

A. 段階的に行う。初級（低学年）で服を着、靴を履く。中級で掃除をする。高級（高学年）で縫製をする。

Q. 社会での働き口はどうか。（住田）

A. 軽度の生徒はサービス業、ホテルのウェイターなどの業務につく。

4. 教室へ（教室の広さは通常教室程度かその半分程度）

・クラスにより服の色が決まっている。色やデザインは、毎年クラス毎に決める。

5F 語訓室…口や舌の体操をして話す訓練をしている。幼稚園児。PC 利用。

烹饪室（料理室）…中華包丁で胡瓜やソーセージを切る。セロリの筋取り。野菜洗い。5 年生 約 8 人、先生 約 2 人

康訓室（3）…ブロックのおもちゃを使って指の訓練。万年筆をにぎる訓練。

康訓室…自閉症の生徒のリハビリ室。日本の病院などにあるリハビリ機器多数。

4F 音楽室…ダンス教室風の設備。姿鏡、PC、ピアノ、太鼓。生徒約 11 人、先生約 2 人。生徒が先生の演示に合わせてダンスを披露してくれた。

電子琴室…電子オルガン 10 台程度。1 人の生徒が電子オルガンをひき、9 人の生徒が先生と一緒にリズムをとりながらタンバリンをたたいていた。もう 1 人の先生は児童の補助。

3F 美術室…指先の細かい動きの訓練で、ちぎり絵を制作。リサイクルペーパーの台紙、色紙、のり。生徒 8 人。池本先生、児童 2 人から作品をプレゼントされ、感動した。

3 年生…… 音楽。先生の電子オルガンに合わせてゲーム感覚で歌っていた。花飾りを友達にわたして順番を決めたり、手を動かして歌ったりしていた。児童 11 人。

1 年生…… 算数。1～6 の数字。プロジェクタで前面に大きく表示。プロジェクタ設備はほぼ全教室に常設されているようである。

2 年生…… スカーフを洗って干し、片づける練習。児童 10 人くらい。先生は一人ひとりの様子を見て一人ひとりに補助をして回っていた。

1F 運動場…体育館くらいの広さ。屋外だが、周りは建物に囲まれている。人工芝、全天候型。一人ひとりがサッカーボールを蹴り足で操作していた。

6. 記念品交換

日本教職員訪問団から学校へは、塗りの小箱を贈り、学校からは 生徒の手作りの花瓶を頂く。

（大賀俊彦）

《参加者の感想》

池本利直……教職員の笑顔がたくさん見られる学校である。玄関前で、会議室へ向かう通路で、階段で、多くの教職員の笑顔があり、明るい印象を受ける。校長からのあいさつの冒頭、「子どもを愛する」との説明がある。「愛」という言葉に新鮮な思いがする。その愛が、教師の人脈を生かし、保護者と力を合わせた授業づくりにつながっていることは、日本におけるより良い授業づくりと同様である。

また、「人のもとにつき、知的障がいのある子どもは、生存（生活）と発展のため努力する」との理念のもと、知的能力や興味に基づいた授業づくりの工夫が見ら

れる。その一方で、教職員からは、「生存（生活）できるための力を育むための教育には、まだ不十分なところがあるのでアドバイスをください。」との声が聞かれ、生存（生活）するために必要な力を更に育むための向上心とともに、子どもへの愛の一片を感じる。

宇土剛……学校の教育理念が「生徒を愛すること」と校長が話した。初心に返るようなすばらしい重みのある言葉だった。この言葉を象徴するかのような、職員の方々の温かい接し方と表情であった。「生存できる」「生活できる」を目標に、先生方も、生徒達も努力をしており、さまざまな工夫ある指導を行っていた。子ども達のにこやかな表情が大変印象に残った。また、各クラスのユニフォームも担任がデザインをしていると聞いた。サッカーの「ドリブルキープ大会」の練習は、全身のリハビリにもなり、さらに、大会もあることが、生徒達のモチベーションを上げ、非常に良い取組だと思った。

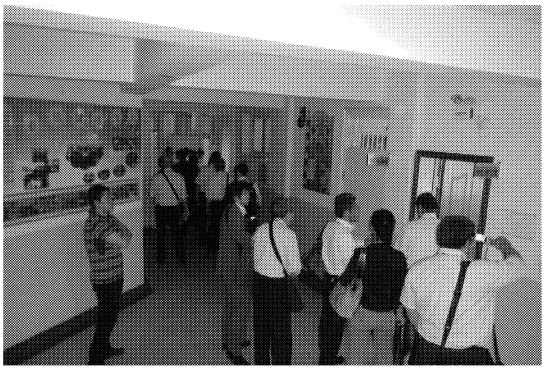
子ども達の一生懸命に取り組む様子が非常に良く、日本の子どもと同じであると感じた。

大賀俊彦……蘭州の繁華街で突如バスから降り、歩くこと数分。目の前のビルが学校であった。さまざまな制約の中でも、果敢に特別支援教育に力を入れ始めていることを感じた。各教室にはプロジェクタが整備してあり、オルガンや PC など、児童生徒の学習に必要なハードはよく整備されていた。さらに、先生と児童は、より一層素晴らしい。学校の理念は、児童生徒が将来社会で生活・生存していくことを見据え、一人ひとりの人格の成長を図ることにあるようだった。いずれ学校を巣立っていく児童・生徒たちが、競争社会の中で、きちんと職を得、生活・生存していけるように、初等中等教育や職業訓練教育に取り組んでいる様子を見学させていただいた。社会的弱者となりかねない児童生徒が生き抜けるように育てようとする、先生方の切ないまでの愛情を感じた学校であった。

橋本直……1992 年に、甘粛省で初めての知的障がい児童が教育を受ける専門学校として設立されたということであったが、楽しく一生懸命に授業に取り組む子どもたちや先生方の姿に「特別支援教育は教育の原点」と言われる意味が分かるような気がした。また、校長の特別支援教育の推進にかける意気込みをそのお話の中から感じるとることができ本当に感動した。

森田康之……学校の施設・設備の充実に、中国の特別支援教育に対する思いを感じることができた。また、児童・生徒に寄り添い、支援している先生方の表情や、児童・生徒を見つめる視線、そっと支援をする仕草に、日本の教師に最も通じるものを感じた。

人通りの多い街中にある学校。


教室を見てまわる（写真は 4 年生の教室）。

楊校長から訪問団へ生徒の手作りの作品が記念品として贈られた。

4. 成果と今後への活用

荒岡格生……

[最も有意義だった内容と成果]

これまで、海外へ行った経験がなく、中国についてもニュースで話題になることくらいしか気にしていなかった。中国に着いた途端、空港の大きさからまず驚き、行く先々で驚くばかりだった。そして、天安門広場の広大さ、いろんな建築物のスケールの大きさは、日本に居てテレビで見ただけでは伝わらないもので、心から「百聞は一見に如かず」だと感じた。

まず、中国教育部では教育制度や中国の教育の方針や教員の研修等について直接話を聞く機会に恵まれたことはたいへん意義があったと思う。また、北京第十五中学、蘭州実験小学、蘭州第三十五中学、西北師範大学附属中学、西北師範大学附属第二中学、蘭州市城関区輔読学校では、学校の見学と児童生徒との交流を体験したこと、どれもが貴重な体験だった。

それぞれが北京市や甘粛省でトップクラスの学校ということで、見学前から施設・設備の充実はある程度予想していたが、全天候の運動場やバスケットボールコート等の屋外施設、ICT 環境、学校の歴史の展示場、学校のミュージアム等、予想以上のものだった。また、小・中学生の英語力や表現力、絵や音楽や毛筆等の芸術の力等も予想を大きく超えていた。どの学校でも共通していたことは、校長先生が自校の児童・生徒、先生方、教育方針に誇りと自信をもっておられたこと、そして、世界に通用するレベルの人材育成を狙って教育を行っているということだった。さらに、そこで学ぶ子どもたちは周りの期待に応えるべく、素直に目標を持って努力していることがわかった。

自分はこれまで、日々の教育活動に追われる中、目の前の教科書をきちんと理解させることだけを考えていた気がする。世界を考えたことはまずなかったと思う。教師が、頭の片隅にでも世界を意識して教壇に立つことは、子どもたちの将来と国の未来に大きな影響を与えると感じた。

また、これだけ鍛えられ、競争している中国の子どもたちの間では、いじめや不登校はないということだった。そこには、家庭教育の影響や伝統的な中国の考え方等、何か違いがあるのかと思った。

最後に、一緒に 7 泊 8 日間に渡って、日本各地の先生方と親しく語り合うことができたことが、もう一つの大きな財産となった。

[今後への活用：学校において]

荒尾市では、年度当初に、中国教職員の訪問を受け入れる小学校、中学校、県立支援学校を決めており、早めの準備、早めの対応を心がけ、交流が実のあるものになるようにしたい。今回のプログラムには、受け入れる予定の学校から担当の先生に参加してもらっており、中国の学校訪問での体験が各学校での交流計画に生かされると考えている。

[今後への活用：その他において]

中国の各訪問先での歓迎は素晴らしいものだった。荒尾市教育委員会は ACCU と連絡をこまめに取りながら、誠意を込めて 10 月の中国教職員の受け入れの準備をしたい。また、中国の教職員のみなさんが日本的なもので児童や生徒と交流ができ、日本の良さを感じることができれば幸いだと考えている。

日本の教職員同士が今後の教育について深く語りあう時間を持つことができた。（情報共有会）

池本利直……

[最も有意義だった内容と成果]

再開された今回のプログラムに参加できたことを光栄に思う。両国間の新たな扉が開かれた感じがあり、これは、「教育交流は交流の原点である（白剛公使参事官談）」という言葉からも再開への熱い思いが伝わ

ってくる。中国出発前夜の大使館での夕食会に始まり、中国教育部、甘粛省教育庁、そして各訪問校からも教育交流への熱い思いを感じる。

教育部・教育庁からは、初等中等教育の現状と共に目指すべき今後の方向性について、誠意ある説明を受ける。各訪問校の子どもたち・教職員、そして学校全体が、より良い結果を獲得するために懸命に努め、教育を取り巻くさまざまな競争に煽られている感じがある。しかし、その中にあって、すべての子どもたち・教職員の目は輝き、動きは溌剌とし、生き生きとした感じが伝わってくる。より良い人的・物的な教育環境が、より良い競争意識の育みにつながっているように感じる。これは、中国教育部が目指す、バランスのとれた子ども負担施策の成果の一部であるように思う。

特に印象的だったのは、最後の訪問校となった蘭州市城関区補読学校での子どもたち・教職員との交流である。「子どもを愛する」という校長の言葉に新鮮な驚きを感じると共に、各教室（授業）の子どもたちと教職員とのあらゆるやりとりの中で、温かさと優しさを感じ取る。特別支援教育における両国間の隔たりは無く、子どもを主体とした教育の実践が同様に見られる。

日本国内における交流も、グローバル社会の中にあって国を跨ぐ交流も、どちらもこれまでにない世界への扉を開くものである。扉を開くことによって、新たな出会いがあり、相互に勉強・刺激しあう良い機会に恵まれる。交流によって誤解が解けることも考えられる。このような交流という機会を一つの点で終わらせることなく、点をつなぎあわせ、大きな面に広げる取組を模索し、延いては国際平和の一助となるよう努めたい。

[今後への活用：学校において]

(1) 7 月：PTA 役員会において概要報告

・中国への関心を深め、両国の友好関係につながる機会とする。

(2) 8 月：職員研修の実施

・十分な時間を確保し、肌で直に感じたことを映像を交えながら伝える。

・質疑応答の十分な時間を確保する。

(3) 9 月～12 月：生徒へ特設授業の実施

・映像を多く交えながら、中国の同い年（中学生）の学校生活について伝える。

・中国の特別支援学校で学ぶ子どもたちの学校生活について伝える。

・メール（画像や簡単なあいさつ）を活用し、子どもたち間の交流を促す。

（→ 私自身、中国の特別支援学校との交流を育むための努力を惜しまない。）

[今後への活用：その他において]

地域の集会や行事等、地域住民が集う機会を生かし、肌で感じたことを正確に伝え、中国を一塊として理解するのではなく、国民一人一人の生活や子どもたちの姿を身近に感じられるように伝える。

（→ 私自身、地域社会とのつながりを広く深く持ち、自己研鑽に努める。）

特別支援学校の教育について共通の志を語る。（城関区補読学校）

一瀬裕之……

[最も有意義だった内容と成果]

最も有意義であった内容は、多くの方々と触れあいながら、多くの教育施設で交流を深めることができたことだと思う。交流を「点から線へ、線から面へ」を目標に事業に参加したが、「点から線へ」は達成できたように思う。今後の活動を通して、「線から面へ」を目指していきたい。教育関係者同士の交流が、国と国との友好へとつながっていくように取り組んでいきたい。もう一つ課題として取り組んだ日中の共通性と相違点を踏まえて、両国の教育の現状を把握し、課題を明らかにすることについても、達成できたと思う。日本の教育で足りないところ、日本や日本の教育のよさも理解することができたので、これからの教育委員会での業務や学校現場に戻ってからの教育活動に生かしていきたい。具体的な視点としては、コミュニケーション能力の向上と、言語能力の向上を意識しながら、自分の考えや想いを自分の言葉で表現し、相手に伝えることのできる生徒の育成を目指していきたい。

[今後への活用：学校において]

現在、教育委員会に勤務しているので、今後 1 年程度で、学校において成果を実践・活用することはできないが、担当している人権教育や PTA の研修、初任者研修や成人講座などで、今回学んだ視点を生かした講義を行っていきたい。

[今後への活用：その他において]

・10 月に中国の先生方が長崎に来られるので、受入プログラムやホームビジット等に積極的に参加したい。

・今回できたネットワークを大切にして、日頃の情報交換や交流を継続していきたい。

・学校現場に戻ってからは、交流の機会をつくることを、まず心がけたい。また、コミュニケーション能力の向上と、言語能力の向上を意識しながら、相手の立場や考えに配慮しながら、自分の考えや想いを自分の言葉で表現し、相手に伝えることのできる生徒の育成を目指していきたい。

生徒との直接交流は、今回のプログラムの大きな収穫のひとつであった。（西北師範大学第二附属中学）

宇土剛……

[最も有意義だった内容と成果]

日中の問題が社会情勢で話題になっている昨今ですが、今回のプログラムを経験し、教育の交流は、平和への第一歩で、世界平和の鍵をにぎると思いました。

どの国の子どもたちも、「すてき！」だと確信しました。その子どもたちの成長を担っている教師の責任の重さも実感することができました。

この経験を今後の自分の教職生活に十分生かしていこうと思います。また、今日から少し英語を勉強し、少しの会話ぐらいはできるようにがんばります。

また、共に活動した 24 名の方々とのつながりを大切にし、長崎に来た折りには盛大に温かく迎える次第です。

海外経験 0（ゼロ）の自分でしたが、先生方、関係の皆様方に助けられた1週間でした。

「世界は広い！」そう思いながら、今後の教育指導に力を注いでいきます。がんばります！

[今後への活用：学校において]

どの学校でも、児童・生徒達のしっかりと話を聞く力（集中力）を見せつけられました。

日本の子ども達は、ノートに書くことは負けないと思います。でも今回の中国の子どもたちの集中して話を聞く姿勢は、見習うところがありそうです。「人の話をしっかり聞くことができる」ことは、その人を大切に思うこと、人権的なこと、さらに道徳的なことにもつながると思います。ぜひ、自校の学力向上プログラムの1つに入れて、取り組みます。堂々と主張する力も、コミュニケーション能力の大きな目標です。自主的な取組、さらには、自分の考えを発信していくような力を身に付けさせていきたいと思います。教科に限らず、学校生活全体で、意識しながら、子どもたちの力を高めていきたいと思います。

[今後への活用：その他において]

10 月に中国の方々が長崎を訪問します。今回のプログラムで得た経験を、「Home visit」に生かし、日本の文化を紹介したり、日本と中国の良さを語り合えるような温かい雰囲気の活動を考え、実践します。

縄跳びの日本式の飛び方に興味津々の児童ら。（蘭州実験小学）

大賀俊彦……

[最も有意義だった内容と成果]

あらためて今の日本は「ありがたい」と気づいた。そこに“伝えること”への「意志の強さ」を子供たちにつけさせたいと感じた。

私の中国訪問の目的は、日本の子どもの姿、日本の学校教育や社会が目指している方向性について、相対的に見る目を養いたい、という点にあった。つまり、日本の子どもや学校教育の何が優れ何が恵まれているのか、何が劣り何をより一層育てていかなければならないのか、を中国の教育事情を理解し比較することで見出したいということにあった。

日本の学校教育の恵まれている点は、だれもが安心して教育が受けられることが当然になっている点にある、と私は感じた。例えば、義務教育段階では学力

や経済力にかかわらず公平に学校で学ぶ機会が保障されている。中国の現実は厳しい。義務教育段階であっても実験校や重点校など優秀な児童生徒が集中する学校があり、児童は学力による厳しい競争にさらされている。それが将来の社会的成功に直結するのだろう。また、都市と農村の経済格差により学校に行けない場合もあると聞く。その解決に向け国家、省、市レベルで果敢に対策を立てていた。もちろん日本の学校教育にも、安心して教育が受けられない状況が数多く存在する。例えば、不登校。でも、学校に行けない子がいれば、先生、親、地域の方を含めて多くの人がその子のために心配し、悩み、次々に対策を講じ、なんとかしようと奔走する。例えば、いじめ問題。でも、「いじめは許さない」ことを徹底し、市、学校、学級などあらゆるレベルで必死の取り組みをしている。例えば、通学路の安全確保。児童生徒が事故をしないように、不審者に出会わないように、地域の方が見守り活動に取り組んでおられる。日本の学校教育の根底には、一人一人の子どもを大切に育て上げること、つまり一人の人間の「人格の完成」を重視しているのだ、だからこそ誰もが安心して教育が受けられるようにすることは当然とされているのだ、という考えがあると感じた。そこが日本の学校教育の、日本の子どもの恵まれている点だと私は感じた。ただ、この恵まれた状況に、日常生活の中では、「ありがたい」と感じることなく過ごしているのが現実だろう。周りの人から支援や助力を得るのは当然のことではなく、私たち日本人が作り上げてきた大切な価値だと思う。この点は先輩教員などから指摘されることはあったが、中国の教育事情を理解し比較することで実感として感じることができたように思う。

一方、日本の学校教育が一層重視していかなければならない点は、「自分の考えを相手に伝えたい、相手の考えを分かりたい」という、コミュニケーションに対する意志の強さではないか。西北師範大学附属第二中学を訪問した際、中学生2人が、英語やジェスチャー、絵、漢字による筆談など、あらゆる手段を使って、自分たちの意見を伝え、私たち大人の意見をわかろうとしてくれたことがあった。私が驚いたのは、彼らが英語を話せることではない。ある話題について、「伝わらない、わからないからやめとこう。」でなはく、「なんとかして自分の考えを伝えたい、相手の考えを分かりたい」と必死になって、食らいついてくる「意志の強さ」であった。そんな中学生につられて、私たち大人も、英語やジェスチャーで必死にコミュニケーションをとった。話題は、ドラえもん、AKB48・福原愛などの日本の有名人、一日の生活リズムから宿題、担任の先生のことまで、実に 50 分間に渡って話した。中国は多様な文化を抱える、競争社会である。したがって、自分の目的をもち、その場その場で適切に自分の意思を表明することは生き抜く上で必須条件であると思われる。今回訪問した中国の学校では英語教育や国際理解教育が重視され、高いレベルの達成度にあることがうかがえた。現在急成長を遂げている中国が、今後とも日本の強力なライバルであり続けることは、この点一つをとっても容易に想像がつく。日本の小・中学校でも、英会話の教育は重視され、総合的な学習の時間等で「伝える」ことがテーマになることが多い。果たしてその中で、「自分の考えを相手に伝えたい、相手の考えを分かりたい」という、コミュニケーションに対する意志の強さは育っているのか。焦燥感を感じたのは私だけだろうか。

教職 16 年目を迎え、教育に関する多くの現実に直面する中で、いろいろと方向性に悩むことがある。そんな中、中国訪問の機会を与えていただき、自分が、あるいは学校教育が進むべき方向性について、確かな自信のような感覚が得られたことは、「ありがたい」と心から感じている。

[今後への活用：学校において]

- 本校の職員向けにプレゼンテーションを行う。学校の様子だけではなく、町や生活の様子なども伝え、日中の共通性と相違の視点から、交流への意欲が高まるように紹介したい。
- 本校の児童向けに、授業などの場を活用して紹介する。休み時間や授業の様子などを紹介し、同じ子どもとして親近感を育てたい。
- 外国籍の保護者に、進んで情報提供をしたり困り感を共有したりする仕組み作りを進める。
- 中国側が来日する際、今回のプログラムで中国側がみせてくれた内容を元に、中国側が求めているであろう内容を想定して準備を進める。

[今後への活用：その他において]

- 近所の中国人の方に今までより、進んで話しかけたり生活に協力を申し出たりできる。
- 報道等で中国について否定的な情報に接することが多いが、今回理解した中国の実情を踏まえ、共通性と相違点の視点から話をすることができる。

於保孝一……

[最も有意義だった内容と成果]

今回の訪問は昨年までなかった中国大使館での壮行会も開催された。また、中国教育部や甘粛省教育庁もとても友好的であった。そこには、今回の交流研修に対する中国の期待を強く感じた。「この教育交流が深められること、もっと貢献されることを期待する。

グローバル時代において交流は素晴らしいものである。交流があってお互いの誤解も解くことができる。」中国教育部の申継亮副司長の言葉にも思いが込められていた。

「百聞は一見にしかず。」のとおりで、この目で見て、肌で感じた中国の人々、教育事情を少しだけ理解することができた。そして、教育環境の中心は教育者「人」であることを中国で出会った多くの先生からも強く感じた。そして、7 日間同行していただいた教育部の馬さん、蘭州市のスタッフの皆さんには、友情のようなものを感じた。この研修の最大の目的である友好関係を築くことができたことに大いに満足している。

[今後への活用：学校において]

本年度中国訪問団が来校される予定です。中国で受けた心からの歓迎に恥じないように、長崎のおもてなしの心で迎えたい。

早速全校集会で児童に中国訪問の話をした。短い時間であったが一部の写真を見せながら行ったので、興味を示した。その後も校長室に毎日のように児童が訪問して来る。たくさんの写真を見せながら話をすると、いろいろな質問をし、さらに興味関心を示している。

[今後への活用：その他において]

先日、地域の民生委員さん方 40 名に講演をする機会があった。前段で訪問の一部を話し、現在の中国教育事情を理解していただいた。PTA 等でも機会あるごとに話をしていくつもりである。

川上恭子……

[最も有意義だった内容と成果]

今回は一時延期になったプログラムの再開ということで、記念すべき時に参加させていただいたと思っています。中国にルーツを持つ生徒のためにも中国のすばらしいところを日本に持ち帰り生徒に伝えたいという思いを持ち今回のプログラムに参加させていただきました。まずは東京で大使館のかたに温かく迎えていただき交流する中で中国にいくことがとても楽しみになりました。プログラムで北京や蘭州市の小学校・中学校・高校・支援学校を訪問させていただきました。どの学校も自分の学校に誇りをもっておられ、先生方からはエネルギーを感じました。そして生徒たちのまっすぐな視線で授業をうける姿に感銘を受けました。そして一番心に残っているのは生徒たちと直接交流できたことです。

小学校では週末には英語教室にも通い、自信満々にこちらからの質問に答えてくれたり、中学校では「今日本語を勉強している。将来は日本に行きたい！」と目を輝かせながら話してくれる中国の生徒がいました。日本をさまざまな角度から知り、興味を持っている生徒の姿をしり、うれしくなりました。今後も今回訪問させていただいた学校と交流を続けていき、相互理解に努めていけたらと思っています。

また、今回のプログラムで出会った先生方と帰国後も連絡を取り合い、中国訪問後の取り組みを共有していきたいと思っています。

[今後への活用：学校において]

中国の国の紹介や学校の紹介を生徒や教師にむけておこなう。

中国にルーツをもつ児童・生徒に中国の話などで交流する。

[今後への活用：その他において]

校内の韓国派遣を経験された先生方とそれぞれ学んできた内容を共有する。

このプログラムで知り合った先生方との交流を深め、それぞれの学校の取り組みなどを紹介し合い、情報交流をする。

積極的に英語でコミュニケーションしようとする児童たち（蘭州実験小学）

久保田寛人……

[最も有意義だった内容と成果]

本プログラムに参加するにあたり中国での教育の現状と課題、またその対策について実際に現地で触れてみたいというテーマを持って出発した。

教育部や教育庁での話で必ず取り上げられる初等中等教育の成功は近年の中国のめざましい発展に寄与している部分もあるのではないだろうかと感じた。一方で地域での教育格差の問題もやはり都市部への人口の流入から生まれるものであることがはっきりとわかった。

プログラム中盤、蘭州での教育問題においても少数民族への教育の困難さを知ることができた。地域によって環境条件や言葉がことなり、それに対応した教員の確保が難しいのが現状である。現在は国家とし

て資金を投入し優秀な教員の育成をめざす施設や大学での養成科を新設している。

初等中等教育部分でのシステムはだいぶ確立してきているが就学前、高等教育、特別支援教育への取り組みはまだ課題を残しているようである。

本プログラム全体を通し中国の子どもたちとそれを取り巻く環境に熱意のようなもの（エネルギー）が至るところにあったように感じた。訪問した学校に共通していえることとして、子どもに対しての上昇志向と競争原理の定着を積極的に行っていると思える。時には表彰することで、時には奨学金を与え、そのなかで彼らは自分のアイデンティティを確立していっているのではないだろうか。

訪問中、特に印象に残った事例は中学生の女子生徒2人と話をしたことである。当然のように彼女たちは英語を話し我々日本人の教員団に何も臆することなく話しかけてくる。

彼女たちは6時まで学校で勉強し、帰宅後2時間はホームワークをする。テレビも1週間に1時間ぐらいしか見ない。休みの日もホームワークをし、一番興味のあることは勉強することだと答えてくれた。彼女たちはかなり優秀な生徒で特別なケースではあるかもしれないが実際にその学校には他にもそういった生徒が多くいたのである。

語学力の高さもさることながら彼女たちのその積極的な姿勢に驚かされた。その瞬間、自分の生徒だったらどのような反応を示すのだろうかと考えた。おそらく中国の彼女たちのように積極的に話しかけることはできないであろう。語学力の差以上に自分を主張できる能力の差が決定的に違うと思える。彼女たちには自分を主張できる実績と自信が備わっており、その中で将来、競争社会を生き抜いていく力をさらに身につけていくことに大きな驚きと日本への危惧を感じる訪問となった。

[今後への活用：学校において]

本訪問での最大の収穫は中国と日本の学生の意識の違いを肌で感じたことである。中国の子どもたちと触れ合うことで彼らの貪欲なまでの学習意欲を日本の子どもたちは持っているのか？と何度も考えさせられた。また中国の学校ではすべてのカリキュラムが国家レベルで管理されてはいるが省や学校レベルでの独自プログラムも数多く行われている。中でも低学年からの英語プログラムや特色ある教育プログラムは日本でも積極的に導入していくべきである。

芸術教科は中国のどの学校も積極的に行われており、授業だけでなく発表や展示に力をいれていることがよく分かった。決して授業時間だけで完結するのではなく生徒の成果を評価、奨励することの大切さを改めて認識させられた。自分の教科（美術）での授業実践にも参考になることが多くあり、徳育の分野での芸術教科の大切さも再認識させられた。そして何よりも中国の子どもたちの学習意識の高さを自分の生徒へいかに伝え、意識の改革が行えるかが今後の課題となるであろう。勤務校への報告だけでなく生徒1人ひとりに本プログラムで見聞きしてきたことを伝え、中国の子どもたちに負けない熱意や自信を身につけさせていきたい。

[今後への活用：その他において]

全日程において中国教育部の暖かい歓迎に感謝したい。このプログラムを期に日中交流に微力ながらも参加していきたいと思う。

佐伯貴昭……

[最も有意義だった内容と成果]

今回の中国訪問について、3つの思いを持って望んだ。

1. 中国はこれまでに訪問したことのない国であり、昨年の韓国訪問の経験もふまえて、人々の暮らしぶりや考え方、教育の実際について見聞を深めたい。
2. 日本の文化を紹介し、中国の先生方や児童・生徒としっかりと交流したい。
3. 国家間ではさまざまな問題を抱えているが、顔の見える交流を通して日中友好の架け橋となれたらと考えている。

初めての中国。北京空港に着陸態勢に入った飛行機の窓から見た景色は、白く靄がかかった景色であった。これがうわさのPM2.5かなと思ったが、市内でマスクをして歩いている人は一人もいなかった。用意していたマスクをするのがためらわれる。空港からバスに乗り、まず目に飛び込んできたのは建設中のビル群。中国の経済発展を実感する。さらに走っている車の多くは、外国製の高級車。国産車はほとんど見かけない。一番驚いたことは、ノーヘルのバイク二人乗りや車の間を縫うように横断する歩行者たち。日本と安全の基準が異なるようであるが、滞在日数を重ねるにつれて、見慣れた光景となっていった。そして、とにかく人が多い。市内を走るバスは、いずれもほぼ満席状態で走っており、夜遅くまで多くの人々が街に出ている。

今回の訪問では、小学校・中学校・高校・特別支援学校の合計6校を視察した。先進的な学校を選んで見せていただいたものと思うが、いずれの学校も設備やセキュリティは日本の学校よりも充実していた。特に韓国同様、ICT機器については、各

教室にコンピュータとプロジェクター（天井設置）、スクリーンが完備されており、見学をさせてもらった多くの授業で使用されていた。日本の学校のICTの立ち遅れを感じる。教室の大きさは日本と変わらないが、そこに 1 クラス 50 人から 60 人の児童・生徒が学んでいる。普通教室では身動きが取れない状態だが、どの児童・生徒も姿勢が正しく、真剣な表情で学習をしていた。また、英語教育にも力を入れており、小学生でも流暢な英語を話し、高学年の児童が低学年の児童にどのように話すかを教える場面も見られた。中学生も堂々と英語で受け答えをしている。日本や韓国よりも英語を堂々と話せる児童・生徒が多いと感じた。日本でも小学校高学年から外国語活動が始まっているが、本校生徒に照らし合わせてみたとき、果たして何人の生徒が外国からの訪問者に対して英語で堂々と話すことができるであろうか。日本でも、低学年から英語の授業を導入し、小学校高学年では「書く」活動も充実させていく方がよいのではないかと感じた。

日本の文化について紹介する機会はなかったが、子どもたちと直接交流できる時間があったことは大変有意義であったと思う。やはり直接交流をすることで、お互いの理解が深まり、相手のことをもっと知りたいと思うようになる。このような顔の見える関係づくりが友好関係を築き、平和につながると確信した。西北師範大学附属第二中学の生徒とはメールアドレスを交換し、メールのやり取りが始まっている。今後もこうしたつながりを大切にしていきたいと考えている。

帰国後、改めて強く感じたことは、今回の中国訪問で得た感動をできるだけ多くの人に伝えること、国際理解や ESD を進めていくためには、今回知り合った日本の先生方とのネットワークを生かして仲間を増やしていくこと、そして目の前の生徒たちの力をつけていくためにも、交流の場を設定していく必要があることである。

[今後への活用：学校において]

・生徒たち

さまざまな機会をとらえて中国の学校や生徒たちの様子を伝えていきたい。中国で触れ合った生徒たちは、恥ずかしがらず英語で堂々とコミュニケーションをとってくる生徒が多かった。本校の生徒が他国の先生方の訪問を受けたとしたら、おそらくモジモジしたままで堂々とコミュニケーションが取れる生徒は少ないであろう。この違いを生徒にしっかりと考えさせていきたい。中国が GNP で日本を抜いて第 1 位の経済大国となり、ますます発展している要因の一つに教育があると感じた。また、中国の生徒たちは学習に対する態度やまなざしは真剣であった。これからの日本を担い、グローバルな人間になっていくためにも、現在の自分たちの姿がこれでよいのかをしっかりと見つめさせたい。

・教職員

学力の向上や生徒の力をつけるために中国の先生方が取り組んでいることは、日本と同じであり、我々が取り組んできていることも間違っていないことを確信した。本校の先生方には、中国で見聞してきたことを日々の話題として伝えながら、校内研修において報告会を開催したいと考えている。また、中国ではどの学校も教職員の資質向上に努めており、本校でもそのシステムをいくらかでも取り入れていくことができるのではないかと考えている。

[今後への活用：その他において]

熊野町内の研修の機会をとらえて、今回の訪問について町内の先生方に報告をしたいと思う。また、機会をとらえて、熊野町だけでなく、広島県内の先生方にも中国訪問の成果を報告していきたいと考えている。

フリーディスカッションの時間は 50 分近く確保された。（西北師範大学第二附属中学）

佐藤　真澄……

[最も有意義だった内容と成果]

児童・生徒との交流が、とても有意義な活動であった。言語の違いから伝え合うことは難しかったが、日本の教育、児童・生徒の考え方との共通性と相違点を感じることができた。中国の子どもたちは、将来の目標を明確にもち、それに向けた努力をしっかり行っている。日本の子どもたちと比べて、心の強さ、意志力を感じた。日本の子どもたちへの心の教育は、より一層充実させていきたい。反面、学習が低位の子どもをフォローする教育は、感じ得なかった。日本の平等で均一的な教育のよさもあると感じた。

北京の中国教育部「中央の教育」と甘粛省教庁「地方の教育」両者の教育内容や課題について話を聞くことができたのも良かった。子どもたちを取り巻く環境

や教師の育成等、広い中国だからこそ、統一や管理が難しいことを感じた。また、環境や設備を充実させ、より高度な教育、発展的な教育を目指していることも理解できた。

[今後への活用：学校において]

・小学校外国語活動研修会における情報提供。教職員の外国語活動における指導の充実を図る。

・同市の教員と連携し、社会や英語の授業において積極的に活用し、中国への興味関心を高める。

[今後への活用：その他において]

・中国訪問プログラムの報告をまとめ、外国教職員を多摩市で受入れる際に活用する。

・参加メンバーと連絡をとり、中国との交流について情報交換し、より効果的な交流を目指す。

塩田　貴子……

[最も有意義だった内容と成果]

トップクラスの教育現場を見ることができて大変刺激になった。特に子どもたちは英語がよくでき、語学力に関しては日本よりも高いレベルで教育が行われていた。また、どの学校も設備が行き届いており、ICT の活用もすすんでいる。子どもたちは学習意欲が旺盛で、海外への関心も高い。学校も競争を奨励したり、積極的に国際交流に取り組んだり、子どもたちの能力を伸ばそうとしている。経済的に発展している中国の勢いが教育にも影響しているように思えた。一方、都市部と農村部では教育の格差があり、その課題を克服しようと取り組んでいることがわかった。

今回のプログラムに参加できたことで、日中友好に対する意識や考え方が以前とは違う視点から捉えていこうと考えるようになった。自分の視野をもっと広げていこうと考える機会となったことに大変感謝している。

[今後への活用：学校において]

１カ月以内に実践：生徒に向けて、特に印象に残ったことや子どもたちの様子を映像や写真を交えて紹介する。特に語学力の高さや学習意欲の高さなど、学ぶところはたくさんあるので子どもたちの視野を広げるチャンスとしたい。夏休み以降の実践：今秋の中国教職員招へいプログラムの受け入れに向けての企画を行う。子どもたちの国際意識を高めるチャンスでもあるので、子どもたちが自然で温かな交流ができるような工夫をしたい。

[今後への活用：その他において]

中国以外にもいろんな国の教育事情について学んでいきたい。国際交流の機会があれば積極的に取り組んでみたい。

鈴木　萌……

[最も有意義だった内容と成果]

北京・蘭州の小・中・高等学校および特別支援学校を計 6 校見学し、校内をめぐるだけでなく、教職員や生徒と交流できたことが最も有意義であったと感じている。教育についての意識の共通点と相違点を多く学ぶことができた。中国教育部や甘粛省教育庁の方の話を聞けたことで、教育的課題のバックグラウンドや政府として目指すところと国民の実情などを把握してから各学校を訪問できたことも、よりよく理解するための一助となり、とてもよかった。

やはり、現地の教職員の教育への情熱を感じられたことは、学ぶところが大きかった。生徒と交流して実際の声を聞かせてもらえたのも、日本に帰国してから自分の生徒に具体性を持たせて話ができると考える。「人と人との交流」が含まれていることが、このプログラムの素晴らしいところだと思う。

また、一週間寝食を共にした参加者同士の交流の意義も計り知れない。日本全国から集まってきている教職員どうしで、各地域・各学校の特色的な取り組みを学び合うことができた。さらに、今後交流する素地を作ることもできた。加えて、同行してくださった中国の方々と何気ない会話をしていく中で、日中の共通点をうれしく思い、差異に関心を深めたりすることができ、本当の国際交流ができたという実感を持てた。

国と国との間でいかなる事情があれども、実際に現地を訪れて「人と人との交流」があればこそ、友好関係を深めることができる。施策としての教育のみならず、国際平和という世界的理念や相手を尊重するという基本的な態度を教職員自身が身をもって確認することで、日本の子どもたちに継続的に還元していくことができるというところが、何より有意義であると思った。

[今後への活用：学校において]

社会科授業の中で、特に地理的分野において中国を考察する際に、広大な国土面積ゆえの気候の違い、多民族国家ゆえの教育的課題などを今回の経験を踏まえながら伝えると共に、日本の現状を振り返って比較するような授業ができると考えられる。また、公民的分野において、日中両国の価値観の差異を理解すると共に、アジアの中でどのように支え合う関係を築いたらよいかを模索し、そのためには互いを尊重する姿勢が重要だということを考えていく授業を計画したい。

クラスや学年においては、現地の学校から学んだ「徳育教育」がこれからの生活指導のヒントになりそうだと思う。自分の意志を強く持って判断したり、礼儀や節度を持って振る舞ったりすることが苦手な傾向の

ある現代の子どもたちに対して、中国での教育のしかたを日本の現状に合った方法にアレンジしながら取り入れることは可能ではないかと考えている。特に、放課後に実施されていた全校の体操はユニークで印象深かった。体を動かすだけでなく、一体感を生んだり規律の精神を養ったりという点で有効であるように感じたので、何か類するような取り組みが考えられないかと思った。

[今後への活用：その他において]

まずは自分自身が公私と共に、常に国際理解の姿勢を表し、他国を尊重することの大切さを周囲に発信していくことである。殊に中国と日本は、歴史的な交流が深い一方で、現代では各種の報道等によって互いに誤解を生みがちな関係になっているのが現状である。さらには、一部だけが拡大された報道を鵜呑みにしてしまう人が多いというのも事実であろう。しかし、実際に現地に行ってそこの空気を肌で感じ、そこで生活する人達と交流することでしかわからないことの方がはるかに多い。そのことを常に頭に置きながら、多様な視点で他国を眺め、なおかつ自国を顧みることこそが国際理解につながるということを、経験談として話しながら伝えていきたい。

日中友好の握手をする団員と白剛公使参事官（中華人民共和国駐日本国大使館）

住田　昌治……

[最も有意義だった内容と成果]

・まず、当初の目的であった中国の教育の実情について知ることができたことは、大きな成果だった。ともすると、画一的な教え込み教育を想定しそうだが、決してすべてがそうではなく、大変先進的で、多様な教育活動が行われていること、各学校の教育方針が明確であったことは感銘を受けた。英語教育やIT教育、テーマ教育が充実してくると、大変大きな教育効果をもたらすことが考えられる。国レベルの強い教育力と省や市、学校レベルの教育がバランスよく行われることによって、中国らしい教育改革が実現していくと思う。知ることによって、お互いを理解し、認め合う素地ができるのだと思う。大変以後のあるプログラムだった。

・一番の収穫は、上述の西北師範大学第二附属中学の超先生との出会いだった。環境教育に対する考え方が、私の考え方とマッチした。活動やできばえ、成果中心の考えではなく、ゆっくりした時間の流れの中で見ていく命の成長とつながり、根源は命であるということ、子どもたちの生活そのものを、望ましい環境の中に置くと言うこと・・・・等、イギリスのブレア政権の提唱したサスティナブルスクール構想を聞いているようだった。ESDと言う言葉は使われなかったが、正にESDの視点で、環境教育を語られていた。こういう考えが中国の教育者の中にあるとすれば、持続可能な社会作りについて共に語り合い、協働していきたいと思った。もしかすると、脈々と続いている中国の歴史と思想がその根底に流れているのかもしれないと感じた。偉大で恐るべき中国を実感した時だった。

[今後への活用：学校において]

上述の、西北師範大学第二附属中学の超先生との交流を始める。

意見交換を通して、子ども同士の意見交換へとつなげていく。

YYネットを使った交流ができるよう、市教委に働きかけ、子ども同士のネットでの交流を行い、第4世代の課題解決への道筋の第一歩を踏み出す。

[今後への活用：その他において]

中国で見てきた教育活動を ESD の視点で、もう一度見直してみる。さらに、その特徴を整理し、日本のガラパゴス化しているESDと比較し、それぞれの良さと課題を明確にする。その資料を基に、聖心女子大の永田先生との意見交換を行い、今後の日本のESD のあり方について考える。

橋本　直……

[最も有意義だった内容と成果]

めざましい経済発展の中で、勉強やスポーツを頑張ることが自分の人生を切り拓いていくことにつながるという夢をもって学業に励んでいる中国の子どもたちのひたむきな目の輝きを多くの子どもたちに見ることができた。

また、そのような子どもたちの夢を叶えさせようと国を挙げて教育に力を入れ、学校現場をサポートされている教育行政の姿勢にも感銘を受けた。

自分の学校でも、子どもたちの目が輝くような教育活動を展開していかなければならないと強く心に誓った。また、子どもたちにも他国の子どもたちとの交流

を通して、自分の生き方を見つめるような機会をつくっていく必要があると感じた。

[今後への活用：学校において]

まず、職員研修の中で学校に広めたいと思う。できれば、荒尾市の小中学校にも広めていきたいと考えている。また、保護者や子どもたちにも伝えていきたい。

PC の授業風景（蘭州市第三十五中学）

久松千樹……

[最も有意義だった内容と成果]

改めて実感したことは、英語教育＝国際理解教育ではないということである。確かに英語力（聞く・話す・読む・書く）が高い児童生徒はたくさんいた。しかし、それは実験学校などの、予算面や人事面で他に比べて恵まれている学校が多いのが実際であることも学んだ。山間部では就学できていない児童生徒もいると聞いた。甘粛省ではそのような児童が 120 万人いると言っていた。日本では、均一的に同じ義務教育を誰もが受けることができる。 また、中国のストアやホテルにおいて、たとえ英語が話せたとしてもサービスを感じる応対はあまり見られなかった。 国際競争力を測る項目の中に、コミュニケーション力があるが、日本は先進国の中で下位に位置する。これは英語力が原因によるものだと分析されている。

思いやりの視点でコミュニケーションを考えた時に、日本は他国より優れていると今回の中国訪問で感じた。日本が誇れるものの 1 つは間違いなく、「おもてなしの心」である。この日本文化とも言うべき不易な部分を大切にしながら、英語力を高める教育に邁進したいと思うことができた。そんなあたり前のことを、中国というフィルターを通して日本を観ることができ本当に貴重な経験をいただいと感謝である。

[今後への活用：学校において]

・中国帰国児童生徒教育相談員に情報を還元する。
・中国帰国児童生徒日本語指導通級教室の担当職員に情報を還元する。

[今後への活用：その他において]

・国際理解教育に関する研修会等で中国の教育事情を紹介する。
・中国教職員招聘プログラムにつなげることで、交流の幅を広げていく。

子どもたちのコミュニケーション能力の高さに驚く（蘭州実験小学）

福島　直美……

[最も有意義だった内容と成果]

教育の現場で働いている方々と直接話をする機会を頂けたことが、自分にとっては大きな収穫であった。小学校だけではなく、さまざまな現場を訪問する機会を得たことで、メディアから発信される表面上の中国ではなく本当の子どもたちの様子を目にすることができた。

訪中前は、数多い教師の指導力向上にどのような取り組みをしているのかと思っていたが、国が出している研修計画に沿って研修を行うだけではなく、試験による昇給制度をとっていることが分かった。また、基本的には教科担任制であるため、専門性が高めやすいのかもしれない。ただ、人数があまりにも多いので、研修を計画して実施することが難しいとのことだった。教師の資質向上は、児童の教育に大きな影響を与えるため、どちらの国でもこれを重視するのだなと思った。校内研究などについては不明のままである。

外国語教育に関しては、中国では英語教育に力を入れており、小学校 3 年生から学習を開始している。「話す」「聞く」だけではなく、高学年では「書く」活動も行っている。そのため、他の国の人と交流をする際に小学生から恐れることなく親交を深めることができるのは素晴らしいと思った。

蘭州市での少数民族の教育について伺った時には、環境条件が厳しいところには、特別な手当てを出し、教科書の無償化、授業料の免除などをしているとのことであった。56 の民族が集まって一つの国家を

形作る中国ならではの配慮であると思う。それぞれの民族がもつ文化や歴史を尊重しつつ、標準的な教育を受けることができるということは、さまざまな国の人が生活する我が国の子どもたちの教育を考える上でも、ヒントになりうることだろう。 国家レベルではなく、まずは教育を担う者同士が交流を深めることが、お互いの将来をよりよくする一歩だと思う。一教員として自分にできることを考える、貴重な機会を頂けたことに感謝している。

[今後への活用：学校において]

・児童や教員に中国の現状を伝える。
・国際理解集会などに役立てる。

[今後への活用：その他において]

・連絡先を頂いた学校との交流を行う。（絵手紙のような物）

前田　成穂……

[最も有意義だった内容と成果]

・中国の人々のエネルギーを感じた日々であった。特に西北師範大学附属中学の生徒との交流では、一生懸命に英語で会話を使用とする意欲など、表現力・思考力・判断力を問われている我々日本人が学ぶべき所であった。
・食文化については、日本の中華料理とは全く違い、シルクロードによりさまざまな文化が融合されており、特に自由時間に行った蘭州の飲食店では蘭州の文化を肌で感じ皆と楽しい一時を過ごすことができた。

[今後への活用：学校において]

・中国文化と日本の文化の違いについて写真等を活用しながら説明していく。
・コミュニケーションの大切さを教えると共に、中国語のおもしろさ（漢字から読み取れる言葉の意味等）を理解させる。

[今後への活用：その他において]

教育行政として、県内の学校に中国等の国々との交流を促進し、児童生徒間の触れ合いを推進していく。

松本雅至……

[最も有意義だった内容と成果]

今回、近年の日中間における政治的諸問題のため、訪問先では冷遇されるかも…と想像していたのは事実であった。しかし、結果はまったく逆で、大変親切に、また誠実なもてなしを受けたことにまず感謝したいと思う。

最も有意義だったのは、訪問先の学校視察は大変勉強になり、中国の教育事情を垣間見る、よい経験ができたことである。ただ、エリートではない、ごく平凡な生徒が通う学校を是非見たかったのも正直な気持ちである。そしてもう一つ、今回参加して良かったことは、蘭州市のど真ん中を流れる“黄河”を間近で見ることができたこと。恐らく、観光では当地に来ることはまずないだろう。そういう意味で、蘭州に来ることができて良かったと思う。謝謝大家。

[今後への活用：学校において]

視察で記録した画像や映像を編集し、授業で説明したい。特に教育のレベルが大変高いこと、日本の学生（自校の生徒や授業内容）と比べて、どう違うか、生徒に意見を聞いてみたい。

言葉に頼らず、書道で交流をする。（西北師範大学第二附属中学）

森木　浩介……

[最も有意義だった内容と成果]

どのプログラムも大変有意義で、貴重な体験をさせていただいたが、次の 3 点が特に有意義であった。

1点目は、中国教育部や甘粛省教育庁など、国や地方の行政関係者から、中国の教育の現状や施策について、直接うかがうことができたことである。

日本の文科省に当たる中国教育部の申継亮氏からは、英語教育に近年特に力を入れていること、特別支援教育の現状は日本と同じくニーズが高まり、諸施策を講じていること等を知ることができた。

また、甘粛省教育庁の王萍氏からは義務教育の充実発展のため、その前後の幼稚園教育、高校教育の充実を目指していること、広大な土地からくる地域間の教育格差の課題やその是正、また環境条件の厳しい状況下にある少数民族への教育の充実に向け手立て（授業料、教科書の無償化、バイリンガル教育の不足に対する専門教師の養成）を講じている。日本と同様の教育課題や中国特有の課題に力を注いでいる様子を実際にうかがうことができたことは、行政に携わるものとしてとても有意義であった。

2 点目は、中国の各種の学校を実際に訪問し、教職員や児童生徒と交流したり、施設や教育実践の様子を視察したりすることができたことである。教育に携わる者としては、児童生徒、施設、教職員の工夫や努

力の様子が最も関心のあるところである。小・中学校、高等学校、特別支援学校とさまざまな校種の学校を訪問したが、どの学校でも温かく歓迎いただいた。真摯に説明していただき、大変感激した。実際に教育活動や施設の様子を目の当たりにすることで、多くのことを実感し、認識することができた。英語による児童生徒との交流では、臆することなく自分の意見や考えを伝えようとする意欲や態度を感じると共に、小学校段階から英語教育に力を入れている様子や教育水準の高さを実感することができた。また小・中学校とも1 学級 60 人を越える人数を感じさせない整然とした雰囲気であった。きちんとした学習規律の浸透は勿論のこと、児童や生徒の学習に対するひたむきさや相手の意見や考えを尊重する態度も強く感じることができた。

3 点目は、本事業を通して、主催者、事務局を始め、各行政機関、各校種からの参加者と交流できたことである。さまざまな機関や校種、地域からの各参加者と、視察し意見交換をする中で、抱える課題の違いを認識できた、多様な考えに触れることができたことは、教育に対する視野を広げる上で有意義であった。この事業への参加を通して構築できたネットワークを活かし、今後も交流を継続して行い、教育に対する視野や幅を広げていきたい。

[今後への活用：学校において]

学校においては、研修の場では、本市からの中国招へいプログラムの参加者数名が講師となり、中国の学校づくりの事例を紹介することが考えられる。

交流については、中国交流プログラム参加者が国際交流の取組などの情報交換等を行っていくことが考えられる。

[今後への活用：その他において]

今後も引き続き中国教職員招へいプログラムの受入をすることにより、彼らのもつものの見方考え方から各校が刺激を受け、学校の特色づくりが促進されるきっかけをつくりたい。

中国の生徒たちは、英語や日本語のほか、筆談も交え、積極的に交流していた（西北師範大学附属第二中学）

森田　康之……

[最も有意義だった内容と成果]

今回のプログラムに参加するにあたって、3 つことを目的として中国を訪問した。

1.中国のESDの取組状況について知ること
2.自校のESDの取組を伝えると共に、教育交流してくれる学校をみつけること
3.今回のプログラムに参加している日本各地の先生方と交流すること

1.中国のESDの取組状況について知ること

教育部の説明では、ESDの専門委員会を設け、パイロット校も配置し、その拡充に努めているということであった。ただ、今回訪問させていただいた学校の多くが「実験学校」であったこともあり、ESDの取組について、具体的に知ることができなかったのは残念である。

しかし、学校訪問の際に、その学校の概要説明の端々に ESD に通じるであろうものがあった。保護者・地域との連携、環境教育、人権教育（道徳教育）、そして国際交流などがそれにあたると考えている。

特に、西北師範大学第二附属中学では、徳育教育を系統立って行い、学校・家庭・社会の三者が協同して徳育教育を行っているという。「振舞いは知識より大切である」という言葉が印象的であった。また、環境教育にも率先して取り組んでいて、「エリート教育から大衆教育へ移行するためにも環境教育は役立っており、過程を大切にし、校内の動植物との触れ合いを重視し、調和のとれた人格の育成を目指している」という言葉に感銘を受けた。

2.自校のESDの取組を伝えると共に、教育交流してくれる学校をみつけること

今回のプログラムに参加することが決まって、地域の協力者に自校のESDの取組をまとめたものを中国語に翻訳していただいた。同じく名刺の裏には、中国語で“教育交流できる学校はメールにお知らせください”と印刷し、持参した資料と共にすべて中国の先生と教育関係者に渡してきた。今後連絡をいただけることを楽しみにしている。

3.今回のプログラムに参加している日本各地の先生方と交流すること

宿舎はもちろん、食事をしながら、移動中の飛行機やバスの中で、たくさん話し、多くのことを学ぶことができた。それぞれの地域・学校が抱えている課題は、自校の課題であり、地域差はあっても、その課題解決のために向かうべき姿勢は全国共通であると、再確認することができた。そして、今回訪問した中国の学校のほとんどが、学力に重点を置き、学力向上のために教職員が力を合わせ大きな成果を上げていたの

と同様に、日本の教職員も児童・生徒の成長を心から願い、同じ方向を向き、力を合わせていけば必ず、大きな成果につながると確信できたことは、私の大きな収穫である。

中国教育部・蘭州教育部の厚意にはいくら感謝してもしつくせないが、これからの日中教育交流の一助となることで、その感謝の気持ちを表していきたいと思う。

[今後への活用：学校において]

・児童朝会で児童への講話
・学校便り・PTA 広報誌にて、保護者へ報告
・職員会議にて、教職員へ報告

[今後への活用：その他において]

・市内副校長会で報告
・市教育委員会へ報告
・市ESD研究会での報告・広報

中国語で児童達に学年を尋ねる訪問団員。（蘭州実験小学）

米山　宏……

[最も有意義だった内容と成果]

私にとっての今回の訪中の最大の目的は 2008 年に NHK で放送されたドキュメンタリー「5 年 1 組小皇帝の涙」の検証であった。訪中以前にこのドキュメンタリーによって中国の教育事情は大方想像がついていた。しかるに訪問各地で番組の内容と同じような話を納得顔で聞いていたのである。特に私が検証したかったのが英語教育の普及度合いである。番組の中では学校の宿題に追われ、さらに将来のためにと英語塾に通う子どもが描かれていた。このドキュメンタリーを本校生徒に見せると、ほとんどの生徒が「日本人に生まれて良かった」という類の感想を書いてくる。ただ敢えて私はそれを否定してきた。世界中でグローバル人材の需要が高まる中、中国の若者が高い英語力で労働市場に打って出れば引く手あまたになるのは目に見えているし、既にそうなりつつある。しかも彼らはただ英語が話せるだけではない。非常に優秀であり、さらにその数は人口大国の名に違わない程大勢である。実際にこの目で見て、確かに中国の子どもたちは一所懸命英語を勉強しており、更にその実力も間違いないものであった。中国の子どもたちが将来のためにこれほど勉強しており、近い未来に君達の大いなるライバルになるであろうという現実を、しっかり日本の子どもたちに伝えていくのがこのプログラムに参加した私の務めであろうと感じている。勿論、闇雲にライバル感を煽り、焦りを誘おうとは思っていない。お互いの優れた点を認め合い、切磋琢磨することが日中両国を更なる発展に導き、ひいては平和友好に昇華させることが可能なのではないかと考える。

[今後への活用：学校において]

一番の活用方法は自分の授業においてであろう。幸い私の授業担当が地理であり、以前より授業中に中国の「一人っ子政策」に関連させた形で中国の子どもたちの置かれた状況について説明してきた。今回の訪中によりまさにその実態に触れることができたので、自分の撮影した映像などを示すことで話のリアリティーが格段に上がり、異次元の授業にすることが可能であると考える。

[今後への活用：その他において]

中国の特に初等教育における英語教育は色々な意味で日本を凌ぐものであると考えられる。 仕事柄、日本の国際理解教育についてのワークショップ・セミナー等に多く参加しているので、実際に現場を視察した者の視点で発言等ができれば、議論の内容に一石を投じることができ、日本の英語教育を再考するきっかけとすることができるかもしれない。

◆資料１．

国 際 連 合 大 学

２０１２-２０１３ 年　国　際　教　育　交　流　事　業

中国政府日本教職員招へいプログラム

（2013 年 6 月 23 日(日)-6 月 29 日(土): 中国／北京市、甘粛省蘭州市）

実 施 要 項

1. 背景

国際連合大学は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）を委託機関として、「国際教育交流事業」のひとつである中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002 年より開始されたこのプログラムにより、これまで 1,200 名を超える教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年約 10 名の日本の教職員を中国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

(1) 中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
(2) 教育現場での交流・意見交換を通し、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
(3) 中国の文化全般への理解を深めること
(4) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 活動内容

(1) 中国の教育政策の現状と課題についての研修
(2) 中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
(3) 学校および教育・文化施設の視察

4. 日程

事前オリエンテーション: 2013 年 6 月 22 日（土）
プログラム実施期間: 2013 年 6 月 23 日（日）から 6 月 29 日（土）（7 日間）

日付	日程	訪問先	活動
6 月 22 日（土）	前日（午後）	東京または成田	事前オリエンテーション
6 月 23 日（日）	派遣第 1 日目	北京市	東京（羽田または成田空港）出発 北京首都国際空港到着
6 月 24 日（月） ｜ 6 月 28 日（金）	派遣第 2 日目 ｜ 派遣第 6 日目	北京市 甘粛省蘭州市 北京市	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学 これまでの「中国教職員招へいプログラム」参加者との懇談
6 月 29 日（土）	派遣第 7 日目		北京出発 （羽田または成田、関西、福岡へ） 日本の各地へ到着

注：訪問先、活動内容については変更の可能性があります。スケジュールの詳細は追って通知します。

5. 参加者

下記の教職員、随行員、計 25 名程度の参加とする。

(1) 2012-2013 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
(3) 2013-2014 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(4) ユネスコスクール、ユネスコスクールに加盟申請中の学校、ユネスコスクール加盟に関心のある学校のうちのいずれかに該当する教職員
(5) 日中間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員
(6) 国際連合大学、文部科学省、ACCU の職員

6. 参加資格

(1) 日本国民であること。
(2) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職 5 年～15 年程度の教員が望ましい。
(3) 将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
(4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

7. 応募手続

関係各自治体の教育委員会、または学校は、参加者を選定し、所定の派遣候補者データシートを揃え、所定の期日までに ACCU へ推薦して下さい。 ＊提出された文書は返却されません。

8. 評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙により ACCU に報告書を提出する。

9. 渡航費等諸経費

(1) 中国政府が下記について負担する。
- 中国国内の移動に要する交通費
- 中国滞在中の宿泊
- 中国滞在中の食事　＊中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
- プログラムの運営に必要な経費（通訳等）

(2) ACCU が下記について負担する。
- 日本（往路：羽田または成田空港、復路：羽田または成田・関西・福岡空港のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション当日（6 月 22 日）の宿泊が必要な場合には、日当の定額および宿泊
- 帰国日（6 月 29 日）の日当の定額（ACCU の規定に準ずる）

注 1：オリエンテーション当日、開始までに到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が前日の宿泊（手配と経費負担）および日当を負担します。
注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が当日の宿泊および日当を負担します。

(3) 各参加者の負担
- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- 上記（1）、（2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について
- 旅券（パスポート）：入国時に 1 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

10. 通訳

プログラム期間中は、日本語‐中国語間の通訳を配置する。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）　人物交流課　（担当：佐々木、外山）
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
TEL: 03-3269-4498/4435　　FAX: 03-3269-4510
E-mail: sasaki@accu.or.jp, n-toyama@accu.or.jp

◆資料２.

2013年度日本教職員招へいプログラム日程表

日	曜日	訪問	時間	フライト	日程
	6月22日 （土）		14:00 17:30 18:30		オリエンテーション（大森東急イン） ホテルチェックイン 専用バスにて移動 中華人民共和国駐日本国大使館主催　夕食会 専用バスにてホテルに戻る ＜東京　：大森東急イン＞
1	6月23日 （日）	北京	06:00 06:10 08:30	CA184	ホテルチェックアウト 専用バスにて羽田空港へ 羽田出発
			11:20		北京首都国際空港（T3）到着
			14:00		チェックイン 昼食（北京西西友誼ホテル 8F バイキング）
			15:30-17:00		天安門広場、国家博物館（古代中国展ホール）見学
			18:30		夕食（文宴閣 校友居） 住所：西城区二龍路 14 号 電話：010-66526258
					＜北京西西友誼ホテル泊＞ 住所：北京市西城区西単北大街 109 号 電話：010-59319898
2	6月24日 （月）	北京	06:30-09:00		朝食（西西友誼ホテル 8F）
			09:00		ホテル出発
			09:30-11:00		教育部（教育部 201 会議室）
			11:30-13:00		昼食（教育部主催食事会　基礎二司申継亮副司長） 会場：北京西西友誼ホテル 8F 老北平レストラン茉莉ホール
			13:30		北京市第十五中学へ向け出発 住所：北京市西城区育新路 2 号
			14:00-16:00		北京市第十五中学訪問
			18:00		ホテルへ戻る
			18:30		夕食（文宴閣 校友居） 住所：西城区二龍路 14 号 電話：010-66526258
					＜北京市　北京西西友誼ホテル泊＞
3	6月25日 （火）	北京	06:30-07:30	CA1277	朝食
			07:30		ホテルチェックアウト，北京首都国際空港へ（T3）
			10:50		蘭州へ向け出発
			13:30		蘭州中川空港到着
		蘭州	15:00		蘭州西湖銀峰ホテル　チェックイン 住所：甘粛省兰州市城关区北滨河路 8 号 電話：0931-8370888
			16:00		甘粛省の教育説明 （講演者：甘粛省教育庁副庁長 王萍）
			18:00		夕食（甘粛省教育庁主催） 会場：蘭州西湖銀峰ホテル

			19:15		バスで夜の黄河を周遊しながらホテルへ戻る
					＜蘭州市　蘭州西湖銀峰ホテル泊＞
4	6 月 26 日（水）	蘭州	08:00		朝食
			09:00		出発（ホテル大ホール）
			09:30-11:10		甘粛省蘭州実験小学訪問（優良小学校）
			11:40		昼食（安伯尔牛肉面）
			13:00-14:00		水車博覧園　見学
			14:30-17:00		蘭州市第三十五中学訪問（優良中学校）
			17:30		夕食（红羽酒楼）
			19:00		ホテルへ戻る
					＜蘭州市　蘭州西湖銀峰ホテル　泊＞
5	6 月 27 日（木）	蘭州	08:00		朝食
			09:30-11:20		西北師範大学附属中学訪問（優良高等学校）
			11:30-12:30		昼食（学校内のレストラン）
			13:00-14:00		游览莫高地下酒窖
			14:30-17:50		西北師範大学第二附属中学訪問（市郊外の中学校）
			18:30		夕食（陇上人家）
			20:00		ホテルへ戻る
			21:00		情報共有会
					＜蘭州市　蘭州西湖銀峰ホテル泊＞
6	6 月 28 日（金）	蘭州	08:00		朝食
			08:30		チェックアウト
			09:30-11:00		蘭州市城関区輔読学校訪問（特別支援学校）
			11:00-13:00		昼食（三千里バイキング）
			14:45		蘭州中川空港到着
			16:00	CA1272	北京へ向け出発
		北京	18:20		北京首都国際空港到着（T3）
			20:00		ホテルチェックイン，夕食 会場：北京西西友誼ホテル 8 层 老北平レストラン
					＜北京市　北京西西友誼ホテル泊＞
7	6 月 29 日（土）	北京	05:00		チェックアウト、乗車
			06:30		北京首都国際空港到着
			08:45-12:50	CA181	空路にて各地へ移動、帰宅 CA181　北京-羽田　08:45－12:50 CA927　北京-関西　08:40－12:40 CA953　北京-福岡　08:55－14:10 （大連経由）

同行：中国教育部国際司アジアアフリカ処　馬力

甘粛省教育庁国際処　張毅　0931-8826130，13239629748

通訳：蘭州理工大学　趙付立

宿泊:

【北京市】　北京西西友誼ホテル（北京西西友谊酒店）

北京市西城区西单北大街 109 号　+86-10-59319898

【甘粛省】　蘭州西湖銀峰ホテル（兰州西湖银峰宾馆）

甘粛省兰州市城关区北滨河路 8 号　+86-931-8370888

◆資料3

1.参加者リスト（21名）

1	荒岡 格生	ARAOKA Masao	荒尾市教育委員会	指導主事	熊本県
2	池本 利直	IKEMOTO Toshinao	熊本県立荒尾支援学校	教諭	熊本県
3	一瀬 裕之	ICHINOSE Hiroyuki	長崎市教育委員会 教育総務部　生涯学習課	社会教育主事	長崎県
4	宇土 剛	UDO Tsuyoshi	長崎市立朝日小学校	教諭	長崎県
5	大賀 俊彦	OGA Toshihiko	総社市立常盤小学校	教諭	岡山県
6	於保 孝一（団長）	OHO Kouichi	長崎市立大浦小学校	校長	長崎県
7	川上 恭子	KAWAKAMI Kyoko	寝屋川市立第十中学校	教諭	大阪府
8	久保田 寛人	KUBOTA Hiroto	学校法人市川学園中学・高等学校	教諭	千葉県
9	佐伯 貴昭	SAEKI Takaaki	熊野町立熊野東中学校	教諭	広島県
10	佐藤 真澄	SATO Masumi	多摩市教育委員会　教育指導課	指導主事	東京都
11	塩田 貴子	SHIOTA Takako	荒尾市立荒尾海陽中学校	教諭	熊本県
12	鈴木 萌	SUZUKI Moe	多摩市立多摩永山中学校	教諭	東京都
13	住田 昌治（副団長）	SUMITA Masaharu	横浜市立永田台小学校	校長	神奈川県
14	橋本 直（副団長）	HASHIMOTO Sunao	荒尾市立荒尾第一小学校	校長	熊本県
15	久松 千樹	HISAMATSU Kazuki	長崎市教育委員会　学校教育課	指導主事	長崎県
16	福島 直美	FUKUSHIMA Naomi	江東区立八名川小学校	主任教諭	東京都
17	前田 成穂	MAEDA Shigeho	和歌山県教育庁学校教育局 学校指導課	児童生徒支援班長	和歌山県
18	松本 雅至	MATSUMOTO Masashi	和歌山県立星林高等学校	教諭	和歌山県
19	森木 浩介	MORIKI Kosuke	総社市教育委員会　学校教育課	主幹	岡山県
20	森田 康之	MORITA Yasuyuki	稲城市立稲城第二小学校	副校長	東京都
21	米山 宏	YONEYAMA Hiroshi	公文国際学園中等部・高等部	教頭	神奈川県

※　所属は2013年6月当時のもの

2.主催者代表（1名）

22	秋葉 正嗣	AKIBA Masashi	国際連合大学　大学院 サスティナビリティと平和研究科	事務局長	東京都

3.文部科学省同行（1名）

23	平井 敏彦	HIRAI Toshihiko	文部科学省　大臣官房国際課 初等中等教育局教職員課	課長補佐	東京都

4.事務局（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）同行（2名）

24	島津 正敷	SHIMAZU Masakazu	公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター	事務局長	東京都
25	外山 紀子	TOYAMA Noriko	公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課	東京都

5.オリエンテーション参加者（5名）

26	新井 聡	ARAI Satoru	文部科学省 生涯学習政策局調査企画課		東京都
27	井川 裕之	IGAWA Hiroyuki	慶應義塾幼稚舎	教諭	東京都
28	佐藤 尚美	SATO Naomi	聖徳学園中学・高等学校	教諭	東京都
29	佐々木 万里子	SASAKI Mariko	公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課	東京都
30	冨本 ひろみ	FUMOTO Hiromi	公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課	東京都

6.大使館（3名）

31	白剛	BAI Gang	中華人民共和国駐日本国大使館	公使参事官（教育）	東京都
32	臼井 将人	USUI Masato	在中国日本国大使館広報センター	公使参事官	北京市
33	名子 学	NAGO Manabu	在中国日本国大使館広報センター	一等書記官	北京市

7.中国側協力者（8名）

34	申継亮	SHEN Jiliang	中国教育部 基礎教育二司	副司長	北京市
35	馬力	MA Li	中国教育部 国際協力交流司		北京市
36	鄭晗	ZHENG Han	中国教育部 国際協力交流司		北京市
37	王鉄輝	WANG Tiehui	中国教育部 国際協力交流司		北京市
38	王萍	WANG Ping	甘粛省教育庁	副庁長	蘭州市
39	張捷	ZHANG Jie	甘粛省教育庁		蘭州市
40	張毅	ZHANG Yi	甘粛省教育庁		蘭州市
41	趙付立	ZHAO Fuli	蘭州理工大学外国語学院日本語科	講師	蘭州市

●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●
中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

2014 年 3 月
編集・発行

国際連合大学[UNU]
〒150-8925　東京都渋谷区神宮前 5-53-70

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
電話 (03)3269-4498　　URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Wako Inc. [150]
©2014　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)